

## Ⅱ 調査結果の分析

## 1. 学生生活の満足度

### Summary

8割以上の学生が、「満足している」もしくは「やや満足している」と回答している。また、団体参加者のほうが不参加者と比べて「満足している」の割合が10ポイント以上高い値を示しており、多くの学生にとって団体に所属するかどうか、学生生活の満足度を大きく左右する要因となっている。

Q 1. あなたは現在、今の学生生活にどの程度満足していますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1 満足している      | 2 やや満足している |
| 3 あまり満足をしていない | 4 満足していない  |

ここでは回答の選択肢のうち「満足している」と「やや満足している」を合わせて「満足」とし、「あまり満足をしていない」と「満足していない」を合わせて「不満足」としたうえで考察する。

まず回答者全体からは8割以上の学生が「満足」しており「不満足」を感じている学生は1割程度しかいないことがわかる。このように本学の学生はおおむね学生生活に満足していることがわかる。

次に所属学部や学年といった属性の違いから満足度にどのような差異がみられるか続けて考察する。所属学部でいえば神学部にて「不満足」の回答数がゼロであること、教育学部と国際学部がそれぞれ学部全体の10%未満でしかないことが特徴的である。つまりこれらの学部は他学部に比べ学生生活に満足している学生が多いことになる。

これは神学部および教育学部ではその性格上、学生同士のつながりが強いと考えられることが、国際学部では新設間もない学部であり、学部全体に活気があることが影響しているのではないだろうか。特に後者の視点は新しい学部である人間福祉学部も「不満足」と回答した割合が比較的低い値を示していることから考えられる。

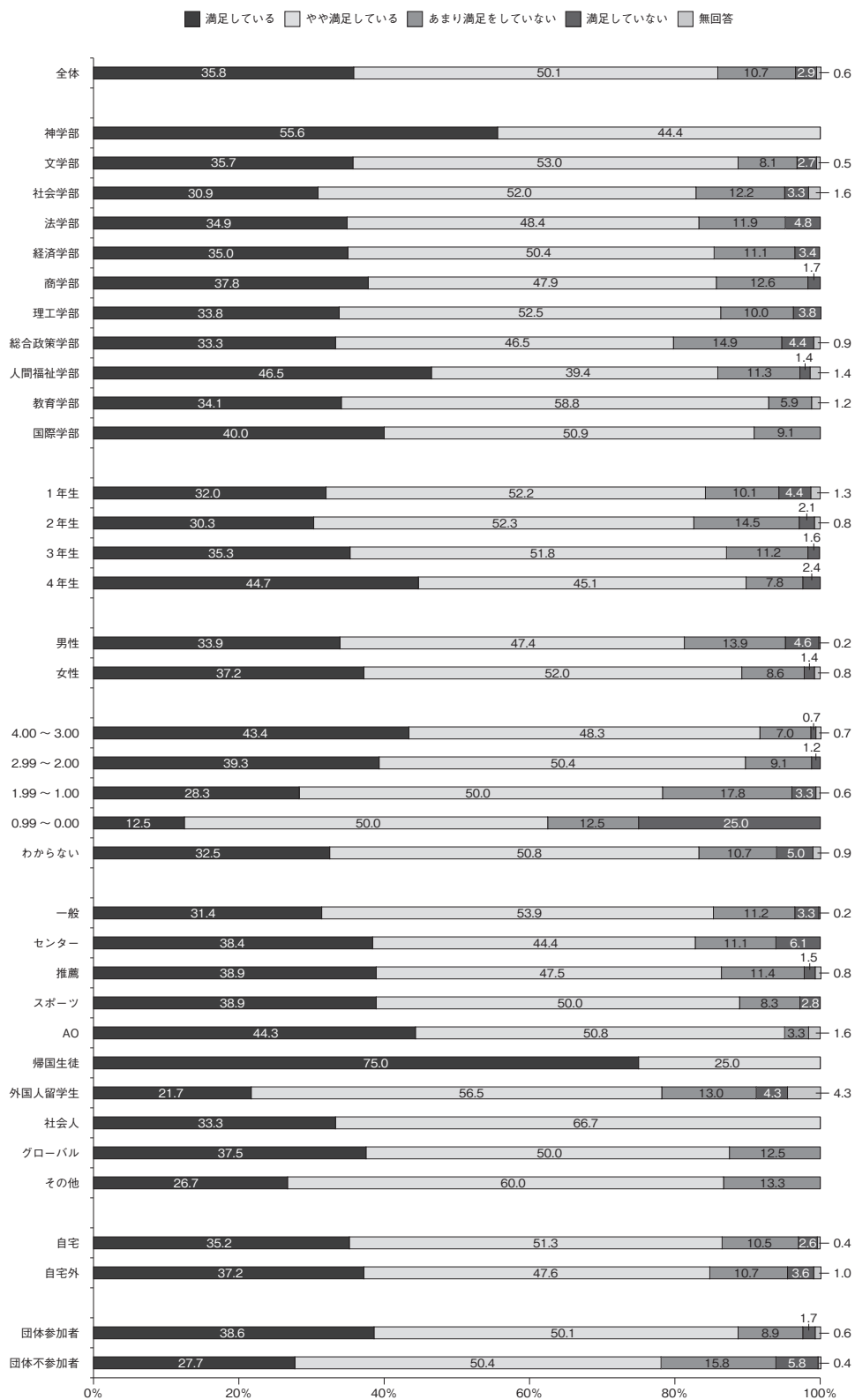
一方で「不満足」の回答がもっとも高い割合を示しているのが総合政策学部である。ただし同じキャンパスの理工学部ではそのような傾向はみられないため、キャンパスの立地による影響は少なく、他の要因があるものと推測される。

さて学年の進行によって満足度がどのように変化するのか考える。回答結果から2年生の時点でいったん満足度が下がることがわかる（「満足」と回答する学生が減って「不満足」と回答する学生が増える）。ただし3年生から4年生にかけて一転満足度は向上しており、4年生の時点ではほぼ9割の学生が「満足」と回答している。学年進行と満足度におけるこれらの傾向を考察すると卒業時にほぼすべての学生が大学生生活に満足しており、その意味では大学として安心してよいだろう。では2年生の時点でいったん満足度が低下する（「不満足」と回答する学生が増加する）のはなぜだろうか。それは1年間の大学生生活の後に卒業後の進路を考え始める時期だからではないだろうか。進路に対する「迷い」が学生生活の満足度に影響と与えていると推測できる。

GPAと満足度の関係では図Ⅱ-1に表すようにGPAが高い学生ほど満足度も高いが、これは学習意欲が高ければそれに見合った成果を得られやすいため、したがって学生生活の満足度も高いと推測できるのでここでは特徴的といえるものはない。

団体所属の有無と満足度の関係では、団体に所属している学生は「満足」と回答した割合がそうではない学生とくらべて10ポイント以上高い値を示している。これは多くの学生にとって団体に所属するかどうかが生徒生活の満足度を大きく左右する要因であると推測できる。

図Ⅱ-1 学生生活の満足度



## 2. 授業の出席度

### Summary

74.7%の学生は履修科目の「すべてに出席」をしており、95%以上の学生が、必修科目はもちろん必修ではない科目にも出席している。GPA3.00以上の成績優秀者は、「すべてに出席」する学生が極めて多い(94.4%)結果となった。

Q 2. あなたは授業にはどのくらい出席しますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

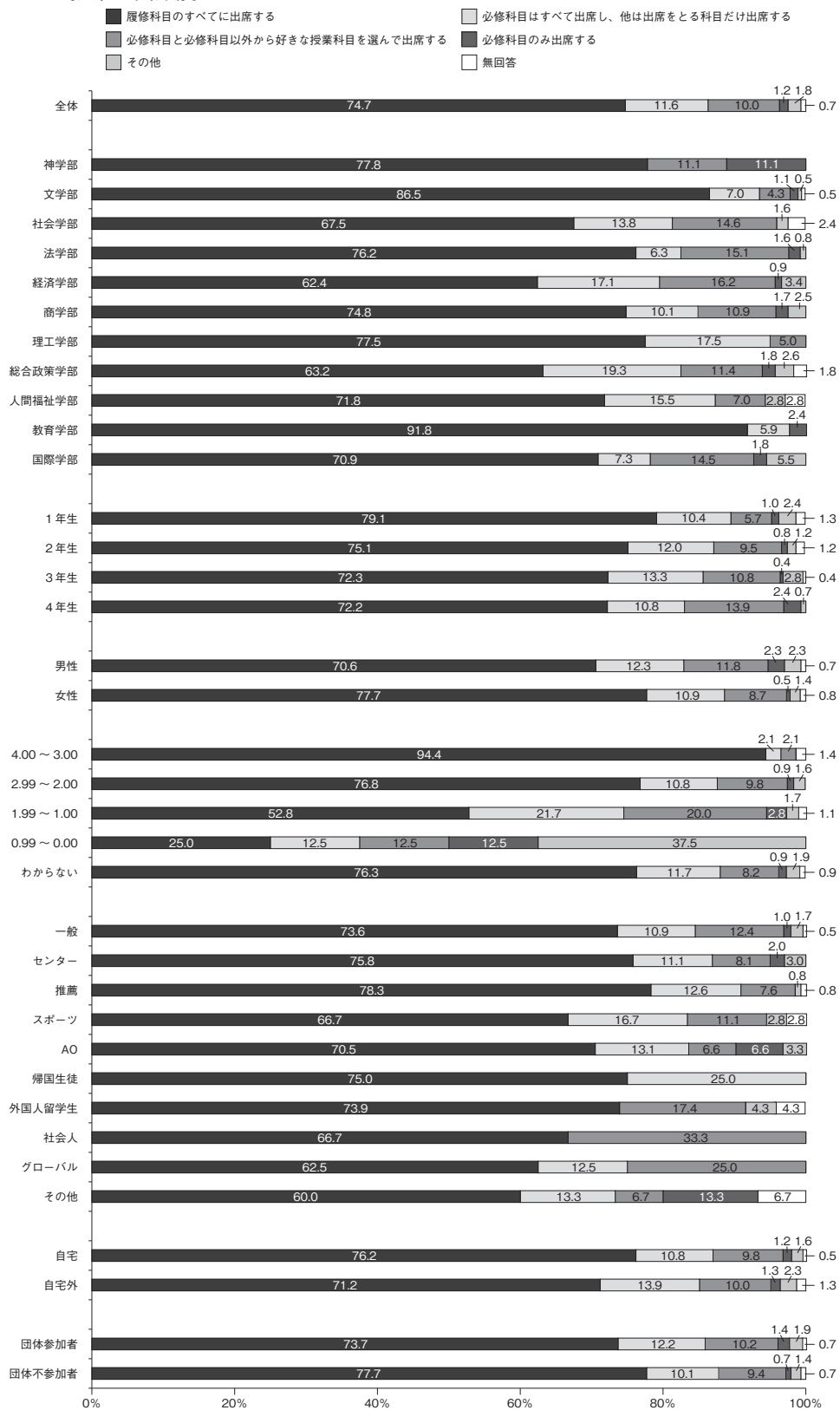
- 1 履修科目のすべてに出席する
- 2 必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席する
- 3 必修科目と必修科目以外から好きな授業科目を選んで出席する
- 4 必修科目のみ出席する
- 5 その他

全体の回答結果から95%以上の学生が、必修科目はもちろん必修ではない科目にも出席していることがわかる。以下「履修科目のすべてに出席する」「必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席する」「必修科目と必修科目以外から好きな授業科目を選んで出席する」の各項目への回答結果に絞って述べてゆく。

学部による回答分布からわかることは学部間の差異が大きいことである。本来はどの学部の学生も全ての必修科目に出席しているはずだが「履修科目の全てに出席する」と回答した学生は教育学部の91.8%が最も高く経済学部の62.4%が最も低い。また必修科目はすべて出席し、他は出席をとる科目だけ出席する」に回答した学生、いわば「出席重視派」とでも称される学生、「必修科目と必修科目以外から好きな授業科目を選んで出席する」に回答した学生、こちらは「興味重視派」とでも称される学生の分布も学部間の差異が大きい。前者は総合政策学部の19.3%が最も高く、後者は経済学部の16.2%が最も高い数値である。これらの回答分布からは、教育学部は資格取得のための科目が多く、かつ出席を重視するものが多いことが数値の高さにつながっており、総合政策学部に「出席重視派」が多いのはキャンパスの立地上、授業以外の課外活動との兼ね合いで「要領よく」単位を習得しようとする学生が多いことがわかる。

学年進行による差異については「全てに出席」および「出席重視派」は数ポイント以内の変動でとどまっており、これらの傾向を持つ学生については4年間を通じて授業への出席態度はあまり変わらないといえるだろう。一方で「興味重視派」は高学年になるほど増加する傾向がある。これは学年進行により時間割に余裕が生じるため、より自分の興味や関心に沿って科目を選択し履修するものと推測される。GPAによる回答分布からはGPA3.00以上の成績優秀者において「全てに出席」する学生が極めて多い(94.4%)一方でGPA2.00未満の成績下位者において「出席重視派」および「興味重視派」一定数存在することも特徴であろう。つまり必修科目が否かを問わず授業の全てに出席する学生は学習意欲が高く、それが優秀な成績につながっていると推測できる。一方で「出席重視派」ないし「興味重視派」に成績下位者が一定数存在することは「要領よく」授業を履修することや、自らの興味のみに沿って履修することが必ずしも成績の向上に結びつかないと推測できる。入試区分による回答分布からは、推薦入試を経て入学した学生に「全てに出席」と回答した学生が最も多い(78.3%)のが特徴といえる。他には帰国生徒入学試験により入学した学生には「出席重視派」が多い(25.0%)こと、社会人入試により入学した学生には「興味重視派」が多い(33.3%)ことが特徴として挙げられる。

図Ⅱ-2 授業の出席度



### 3. 各項目の費やす時間

#### Summary

1週間に10科目以上出席している学生（週に16時間以上を選択している学生）が56.7%と半数以上を占める結果となった。なお、授業関連の授業外学習は、1日あたりの学習時間が1時間以下の学生が76.5%を占めるため、授業外学習を推進する必要がある。授業外の学習（専門学校）は約7割、クラブ・サークルや仕事・アルバイトは約3割の学生が、全く参加していない結果となった。大学での授業時間以外の滞在時間が、「全然ない」と回答した学生が11.9%存在するため、本学への帰属意識や大学への関わりが希薄になっている懸念がある。

Q 3. あなたが1週間（7日間）に、下記①～⑥の項目ごとに費やす時間を以下の1～9の中から選択して、記入してください。

- |                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| ①大学の授業への出席      | ②授業関連の学習（予習・復習・宿題）       |
| ③授業外の学習（専門学校など） | ④クラブ・サークル（課外活動時間など）      |
| ⑤仕事・アルバイト       | ⑥大学の授業時間を除いて、大学に滞在している時間 |
- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| 1 全然ない        | 2 週に1時間未満     | 3 週に1～2時間     |
| 4 週に3～5時間     | 5 週に6時間～10時間  | 6 週に11時間～15時間 |
| 7 週に16時間～20時間 | 8 週に20時間～40時間 | 9 週に40時間以上    |

#### ①大学の授業への出席

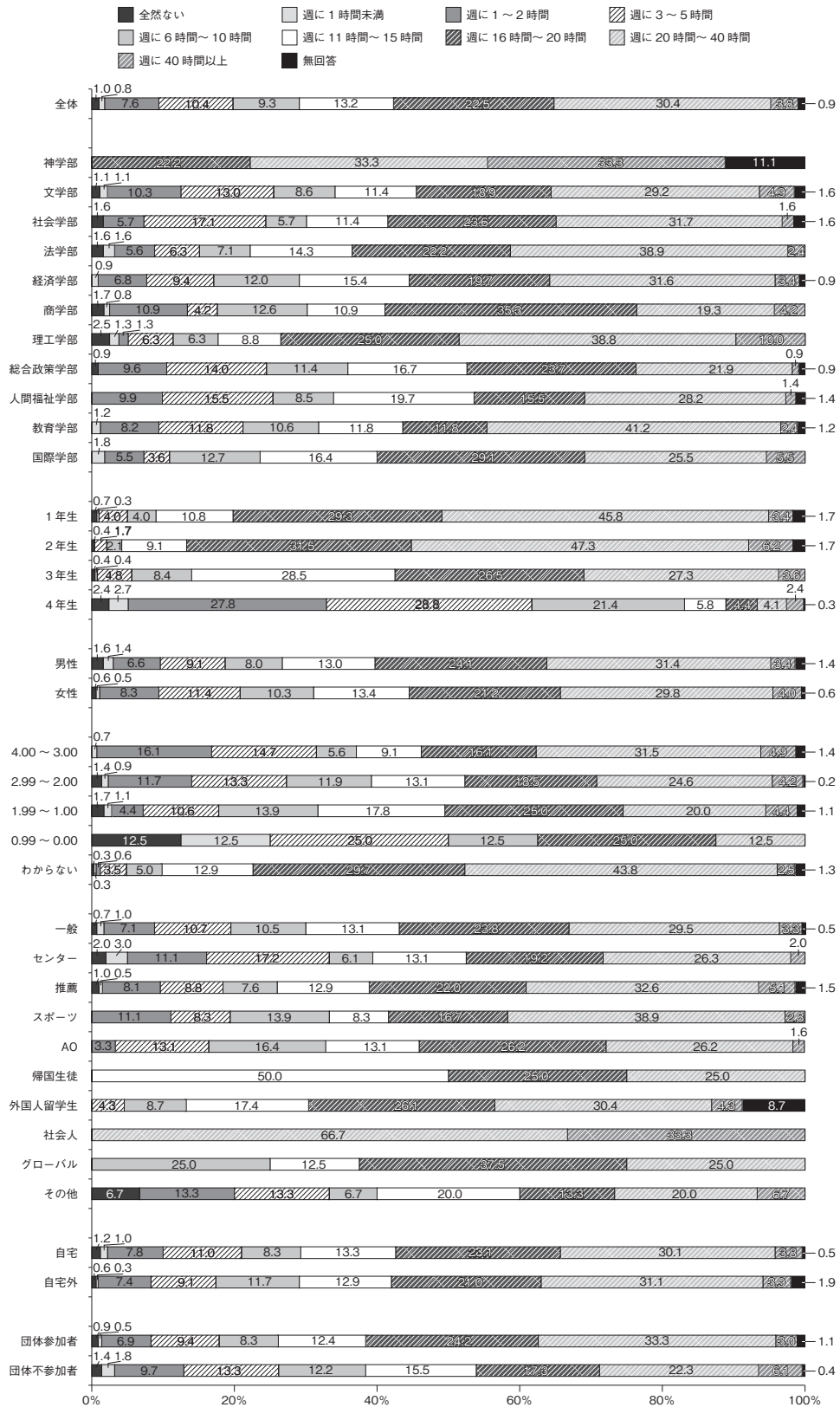
週に10コマ以上出席している学生（週に16時間以上を選択している学生）が56.7%と半数以上を占めている。学期あたりの学生の登録授業数が多いことは本学のみならず日本の高等教育の特徴となっているが、今回の調査においてもその実情が裏付けられた形となっている。

一方で週に1コマほどしか出席しない学生（週に2時間以下を選択している学生）が9.4%と全体の約1割存在する事も特徴的である。本調査の約4分の1を四年生が占める事もその理由と考えられるが、3年時までには必修単位を修得できてしまう事が常態化していることをよしとするかどうかは別問題である。今後は厳格なCAP制などの導入も含めて議論の余地が残されている。

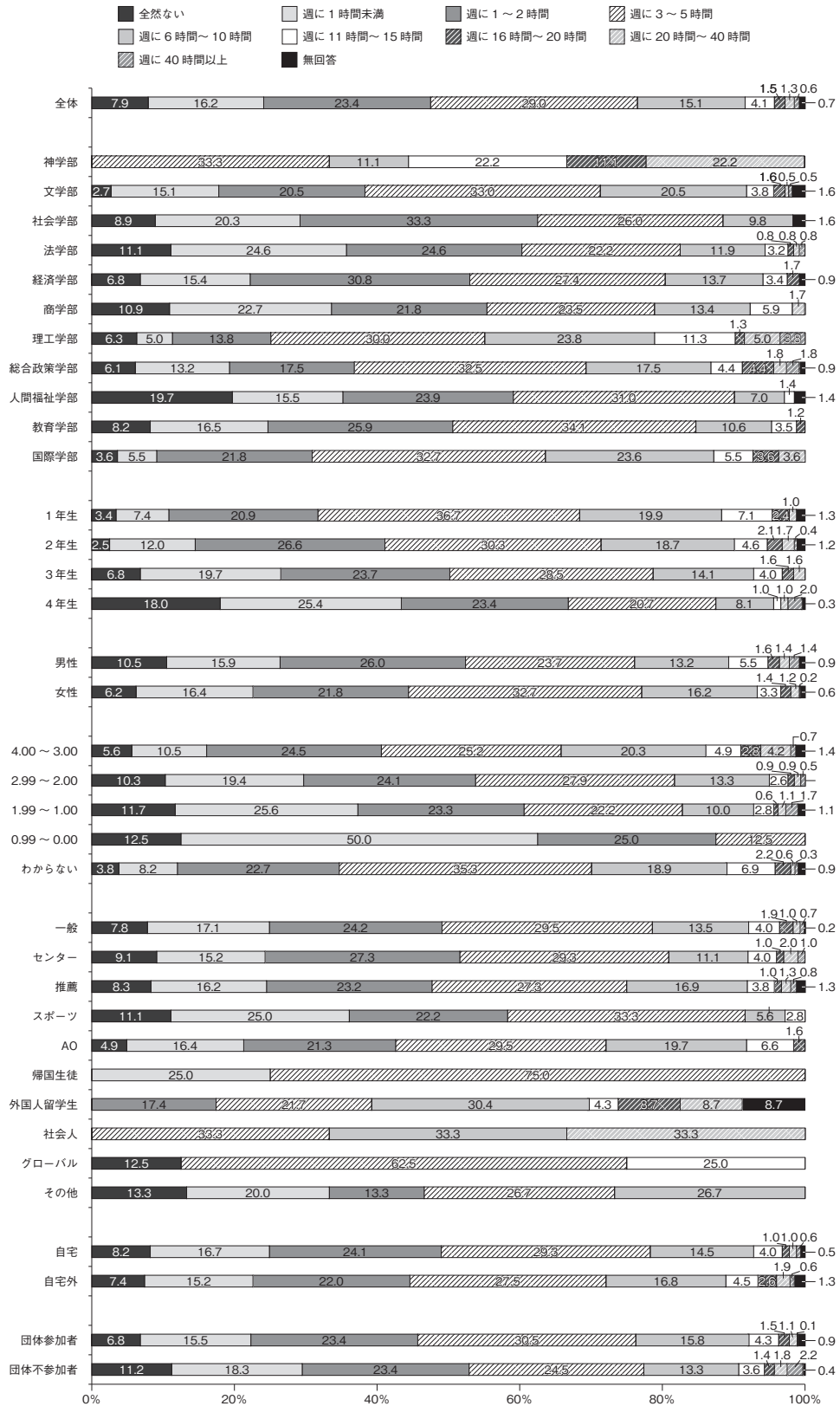
#### ②授業関連の学習（予習・復習・宿題）

1日あたりの学習時間が1時間以下の学生（週に5時間以下を選択した学生）が76.5%と、本学学生の4分の3を占める。これは週末を除いた平日のみで考えたもので、週末も考慮に入れるとさらに数値は悪化する。2012年3月26日中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」においても、「質の高い学士課程教育に不可欠な学生の学修時間が極めては少ないのが実態である。」と述べられており、日本の学生の授業時間外学習の少なさは全国的な問題であるが、残念ながら本学においてもその状況に変わりはない。日本の高等教育における単位制度が授業時間およびそれに付随する時間外学習で成り立っていることに触れるまでもなく、現在の状況に対して何らかの方策が求められる状況であるといえよう。

図Ⅱ-3-1 各項目に費やす時間 ①大学の授業への出席



図Ⅱ-3-2 各項目に費やす時間 ②授業関連の学習（予習・復習・宿題）





### ③授業外の学習（専門学校）

一日1時間以上の専門学校に通学している学生は、全体の8.3%とそれほど多くないが、週に20時間以上専門学校等に通っている学生が2.8%存在する。4年生が中心ではあるが、こうした学生達が通常の登録授業数に出席するのは極めて困難である事が想定される。これらの学生達に積極的にアプローチすることによって、今後求められる教育カリキュラムのヒントが得られるのではないだろうか。

### ④クラブ・サークル（課外活動時間など）

全体の31.2%が、クラブやサークルに全く参加していない結果となった。これらの学生達の中には、上述したダブルスクールの学生や、アルバイトに精を出す学生も考えられるが、それとは別に大学やその他組織への参加を全く行っていない学生も予想される。ここからはさらなる分析が必要となるが、その一方でこうした学生達に、できるだけ早くなんらかの対応を進めて行くことも、現実の問題として早急に必要であろう。

### ⑤仕事・アルバイト

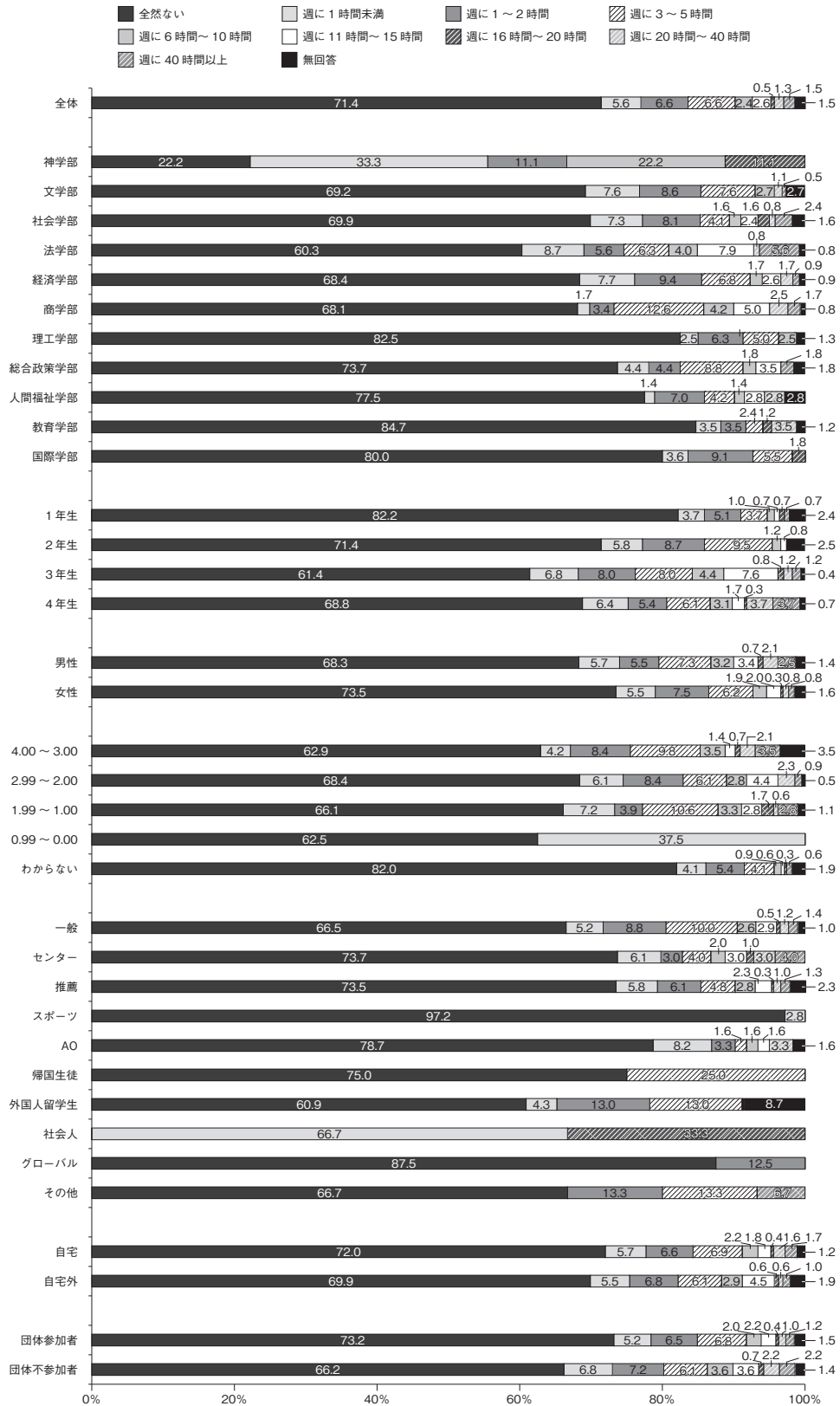
平日に仕事・アルバイトで過ごす時間が、「全然ない」という回答が30.2%ある一方、一日あたり平均して2時間以上アルバイトしている学生（16時間以上を選択した学生）が21.9%にのぼる。さらに週に20時間以上アルバイトしている学生も9.6%にのぼる。これらの学生がしっかり授業に出席できているのかについても、さらなる分析が必要であるが、同様に現実の問題として早急な対応策が必要であろう。

### ⑥大学の授業時間を除いて、大学に滞在している時間

「全然ない」と回答した学生が11.9%存在する。これらの学生は、授業のみでしか大学に滞在していないということなので、これらの学生の一部は、本学への帰属意識や大学への関わりが希薄である可能性は否めない。それが単なる現状への不満から来ているのか、それとも何らかの適応の問題から来ているのか、場合によっては個別の対応が必要である可能性も否定できない。

一方で1日あたり約3時間以上滞在している学生（16時間以上を選択している学生）が全体の11.4%存在する。①で調査したように、授業外学習の時間は短い結果となっているので、サークルや部活で滞在するケースが多いと考えられる。2013年度に神戸三田キャンパス、2014年度に西宮上ヶ原キャンパスにコモンズが設置されたので、コモンズを利用した授業外学習が増加に繋がるかどうか、そのあたりのさらなる詳細な分析を進めていきたい。

図 II-3-3 各項目に費やす時間 ③授業外の学習（専門学校など）



図Ⅱ-3-4 各項目に費やす時間 ④クラブ・サークル（課外活動時間など）

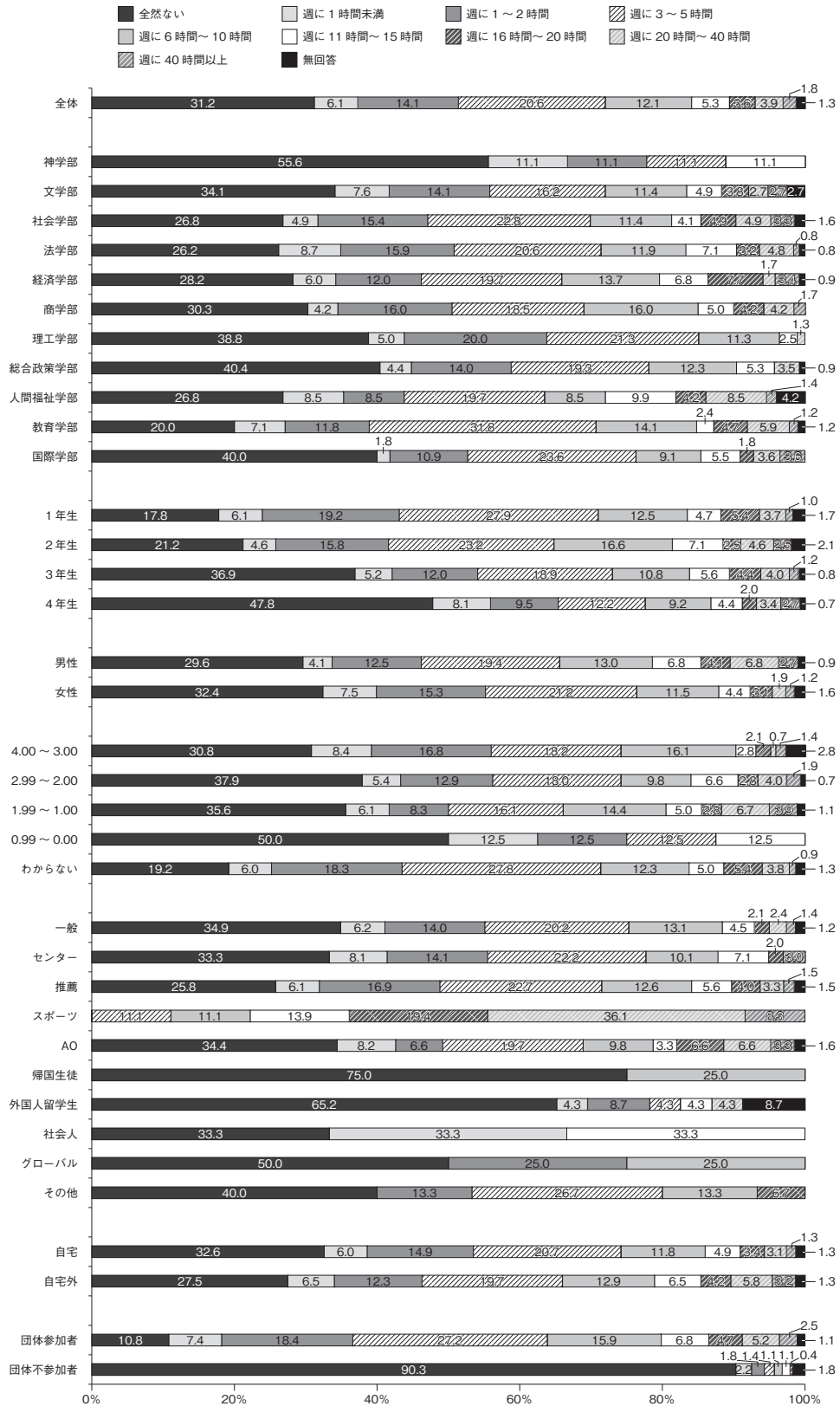
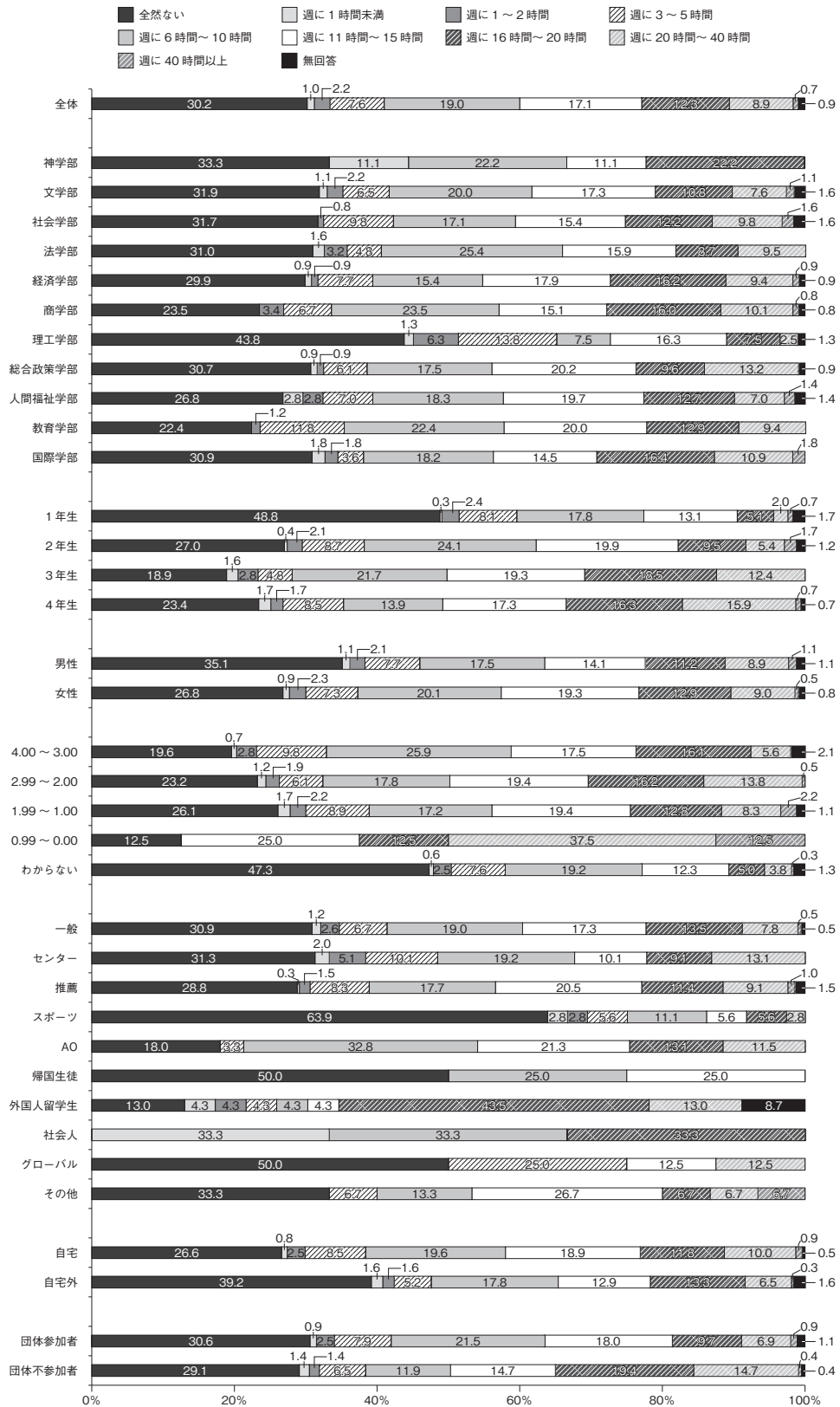
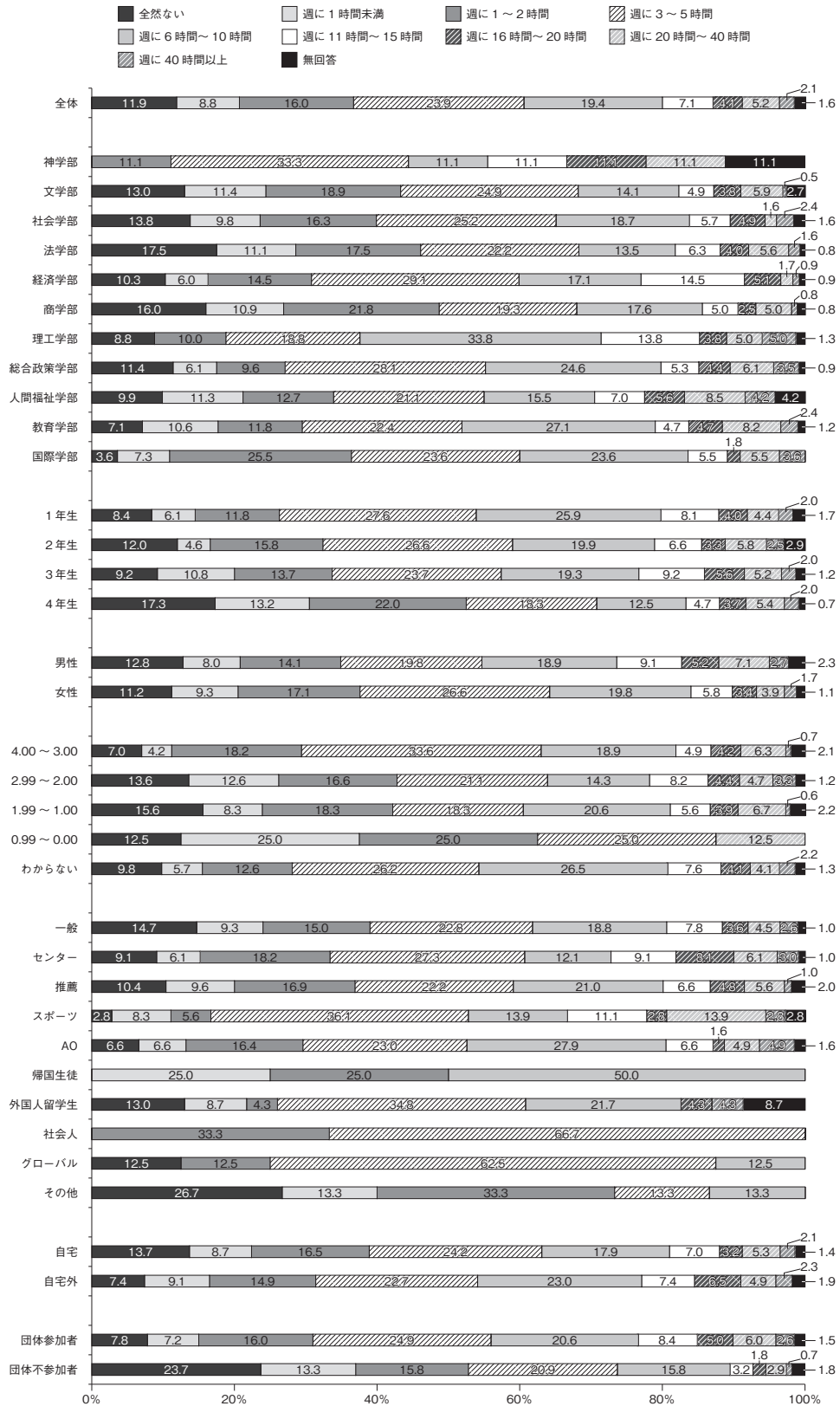


図 II-3-5 各項目に費やす時間 ⑤仕事・アルバイト



図Ⅱ-3-6 各項目に費やす時間 ⑥大学の授業時間を除いて、大学に滞在している時間



## 4. 在学中に身につけたい能力

### Summary

最も身につけたい能力は、「コミュニケーション能力」(82.3%)である。一方で、唯一「身につけたい」の回答が過半数を割り込んだ項目は、「リーダーシップ能力」(45.2%)である。「コミュニケーション能力」そのものは、高めてみたいと考えているものの、集団をリードして行くような積極的なコミュニケーションを意図しているわけではないという点については考慮する必要がある。

Q 4. あなたが在学中に身につけたい能力は何ですか。

A～Iについて、それぞれ1（身につけたい）から4（身につけたくない）までの数字を1つだけ選んで○をつけてください。

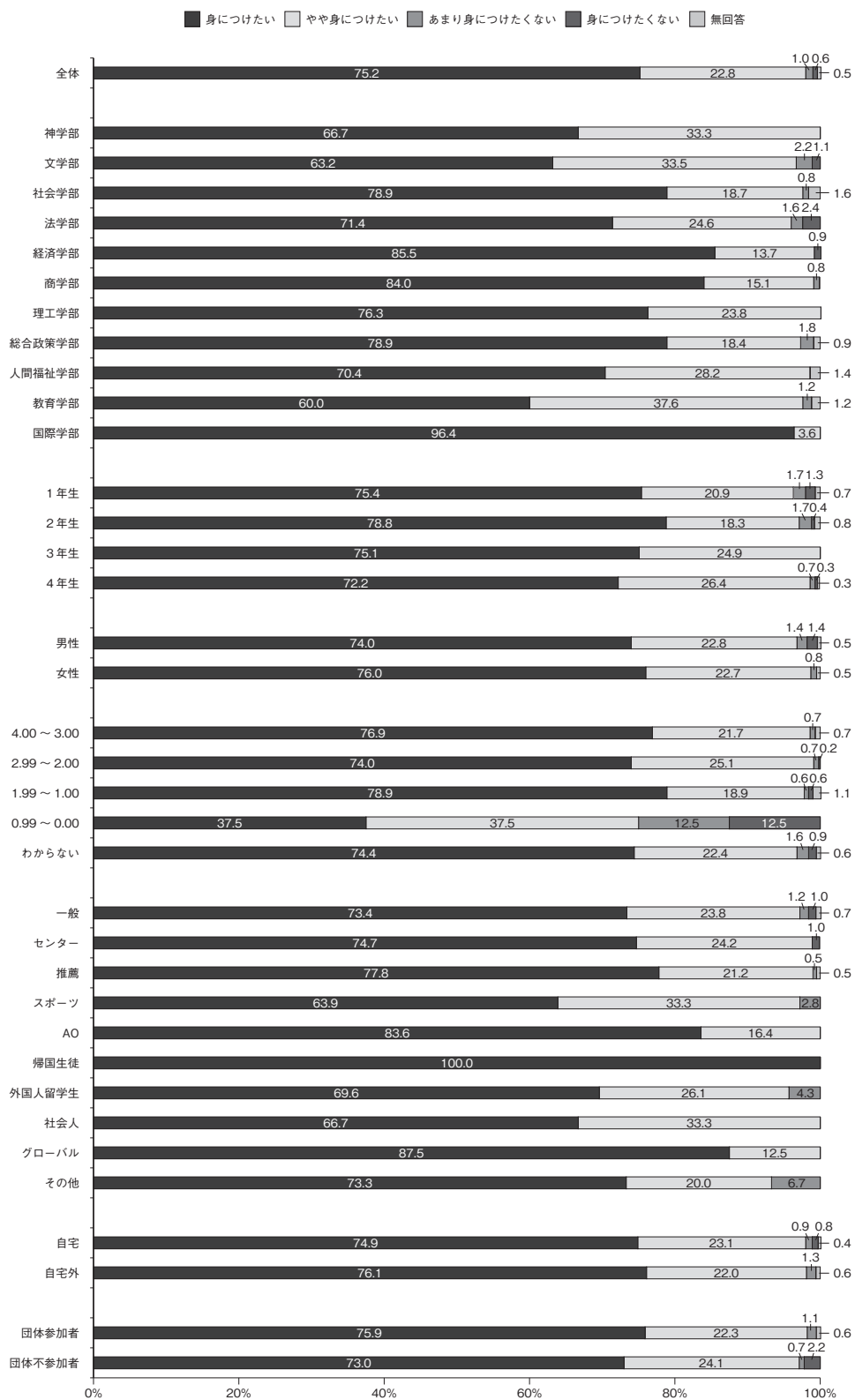
- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| A プレゼンテーション能力   | B ディスカッション能力   |
| C コミュニケーション能力   | D リーダーシップ      |
| E 集団の中での協調性     | F データ処理、事務処理能力 |
| G 企画・アイデアなどの創造力 | H 人間関係の構築力     |
| I 外国語運用能力       |                |

リーダーシップを除く全ての設問で、「身につけたい」と「やや身につけたい」の合計が回答の9割を占めており、全体的に本学の学生が様々な能力について身につけていきたいというポジティブな対応を示していることがみとれる。

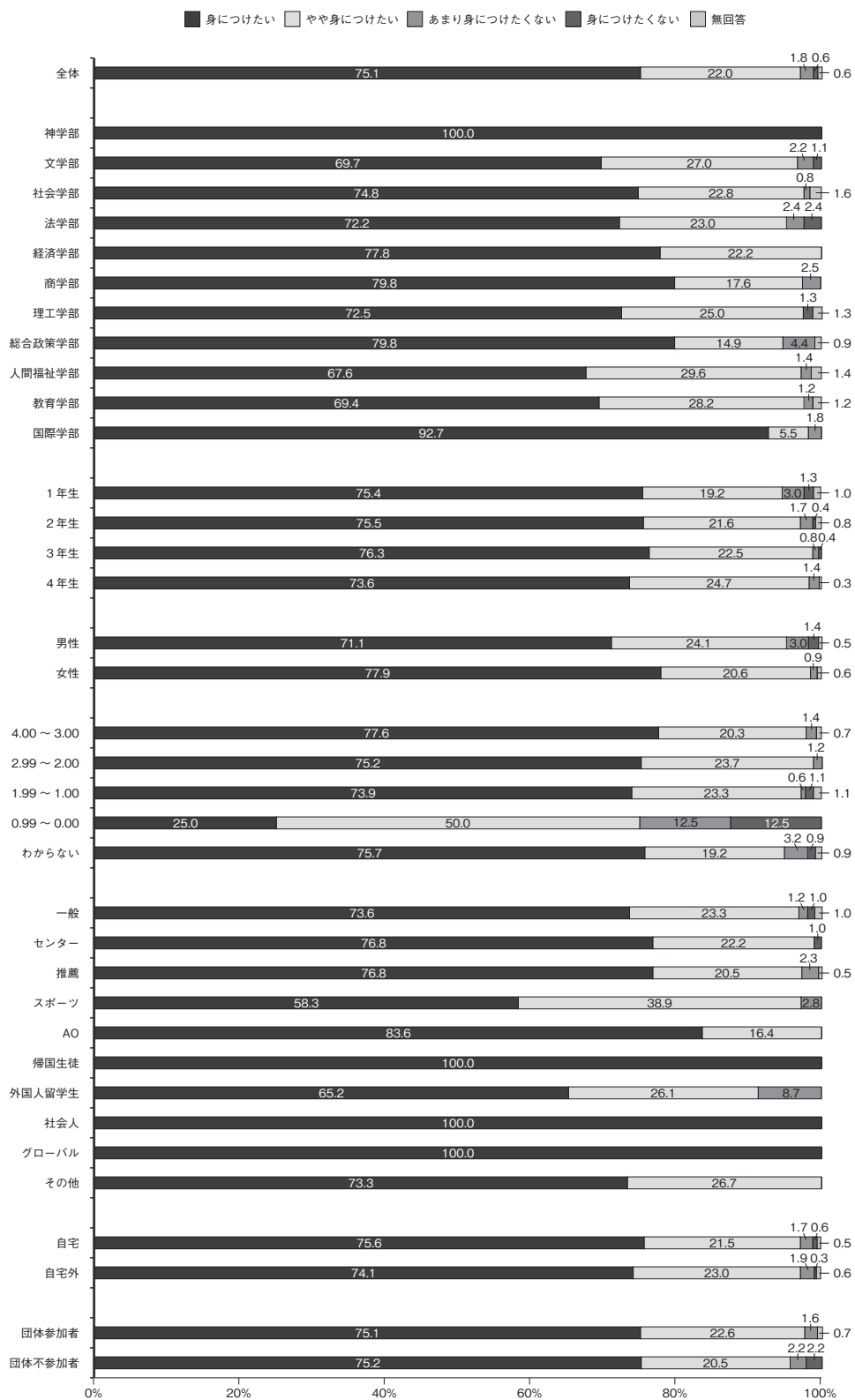
各設問を詳細にみていくと、同じくポジティブな回答の中にも特徴的な傾向がみられることがわかる。学生は、コミュニケーション能力(82.3%)、プレゼンテーション能力(75.2%)、ディスカッション能力(75.1%)を「身につけたい」と回答しており、高い意欲を示している。

ただ、プレゼンテーション能力とディスカッション能力については回答比率がほぼ重なっており、各能力の語義的な差異について、学生が厳密に理解しての回答であるのかどうかには若干の疑問が残る。一方で関連するこれら三つの能力のうちコミュニケーション能力の習得に最も高い回答が得られたことは、マスコミ等で喧伝されるいわゆる「コミュニケーション能力の習得」に対する社会的欲求の現れでもあるかもしれない。一方で、唯一「身につけたい」の回答が過半数を割り込んだ項目は、リーダーシップ能力(45.2%)である。コミュニケーション能力そのものについては、身につけたいと考えているものの、集団をリードして行くような積極的なコミュニケーションを意図しているわけではないという点については考慮の上で対応していく必要が求められる。

図Ⅱ-4-1 在学中に身につけたい能力 A プレゼンテーション能力



図Ⅱ-4-2 在学中に身につけたい能力 B ディスカッション能力

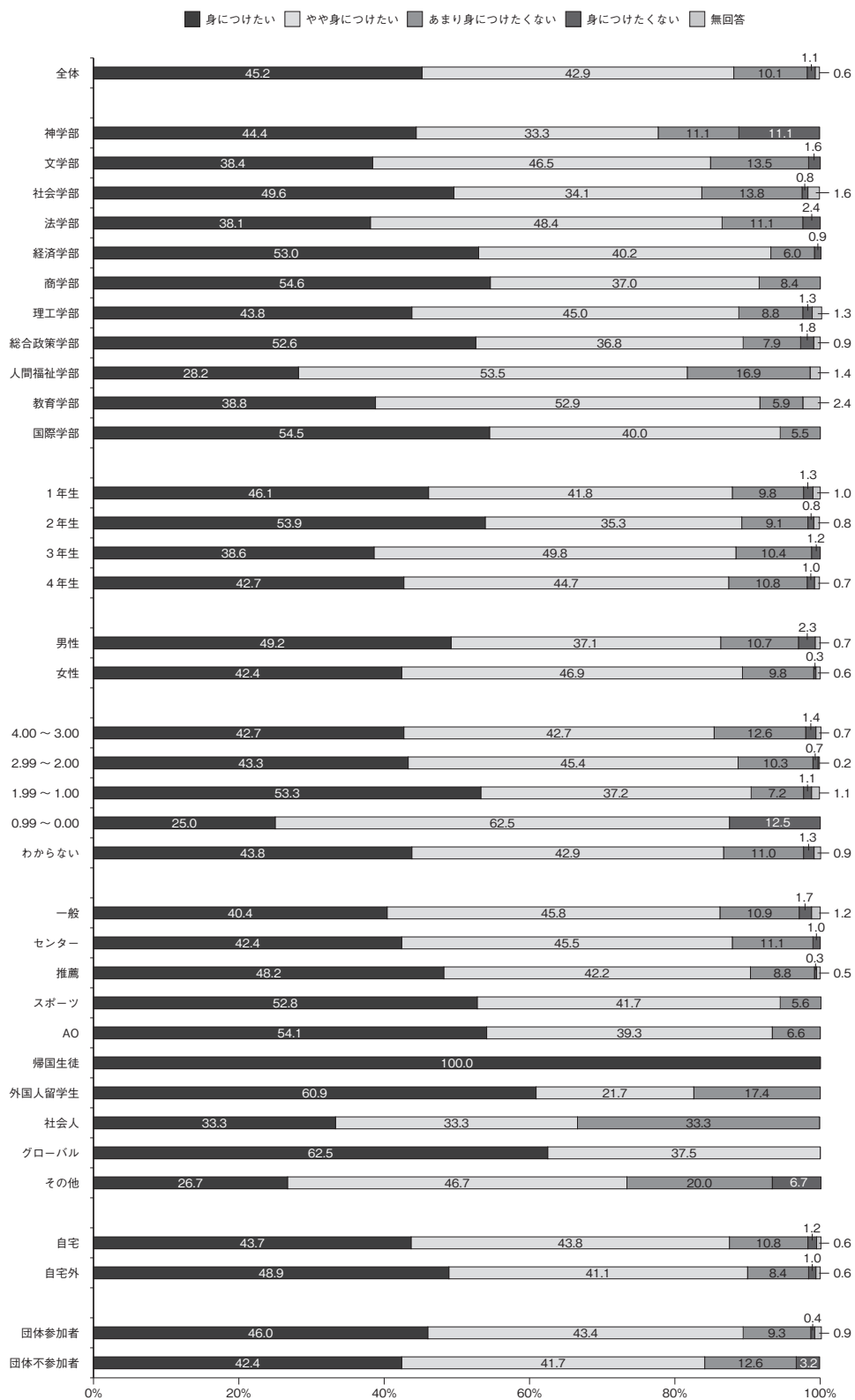




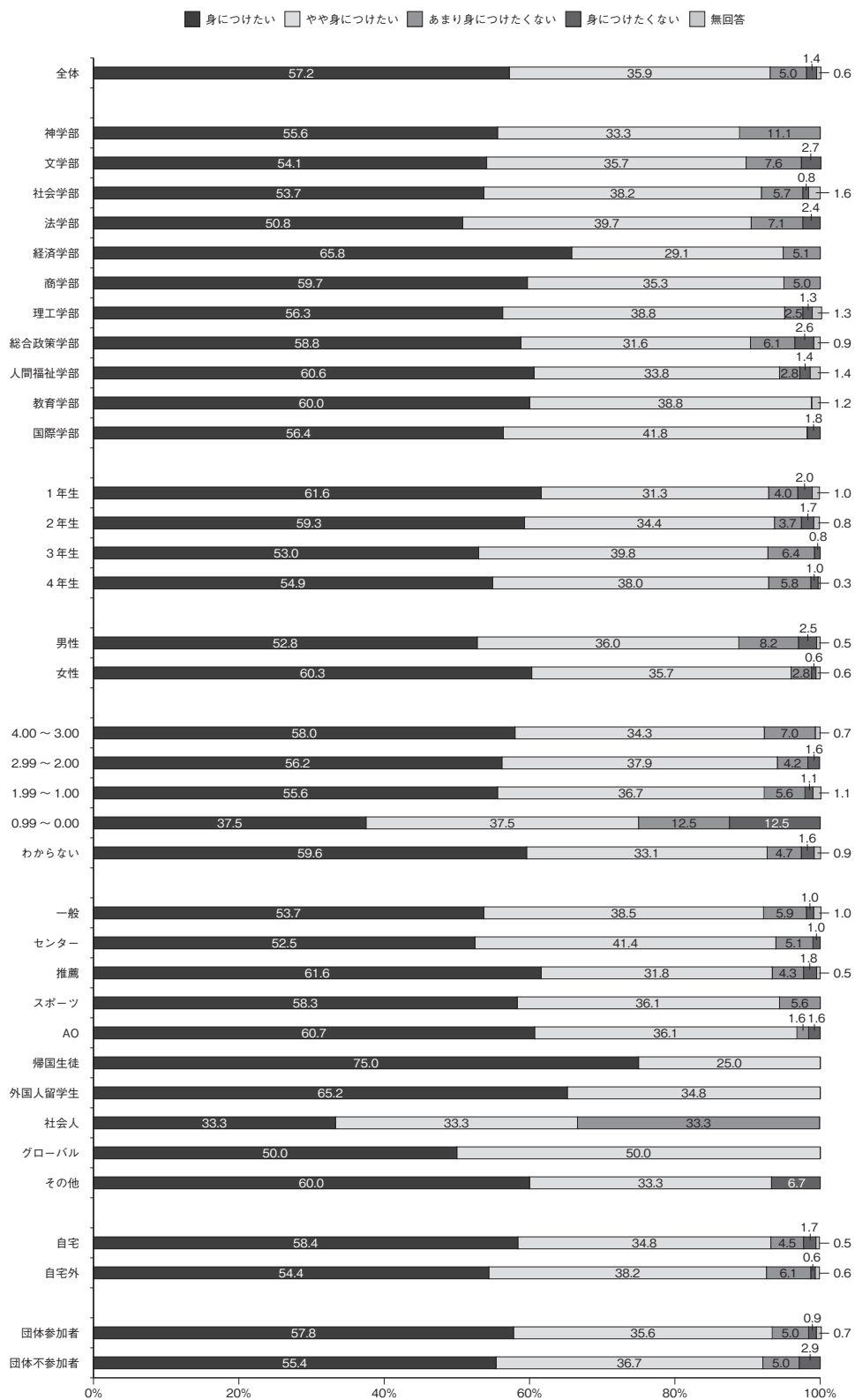
図Ⅱ-4-3 在学中に身につけたい能力 C コミュニケーション能力



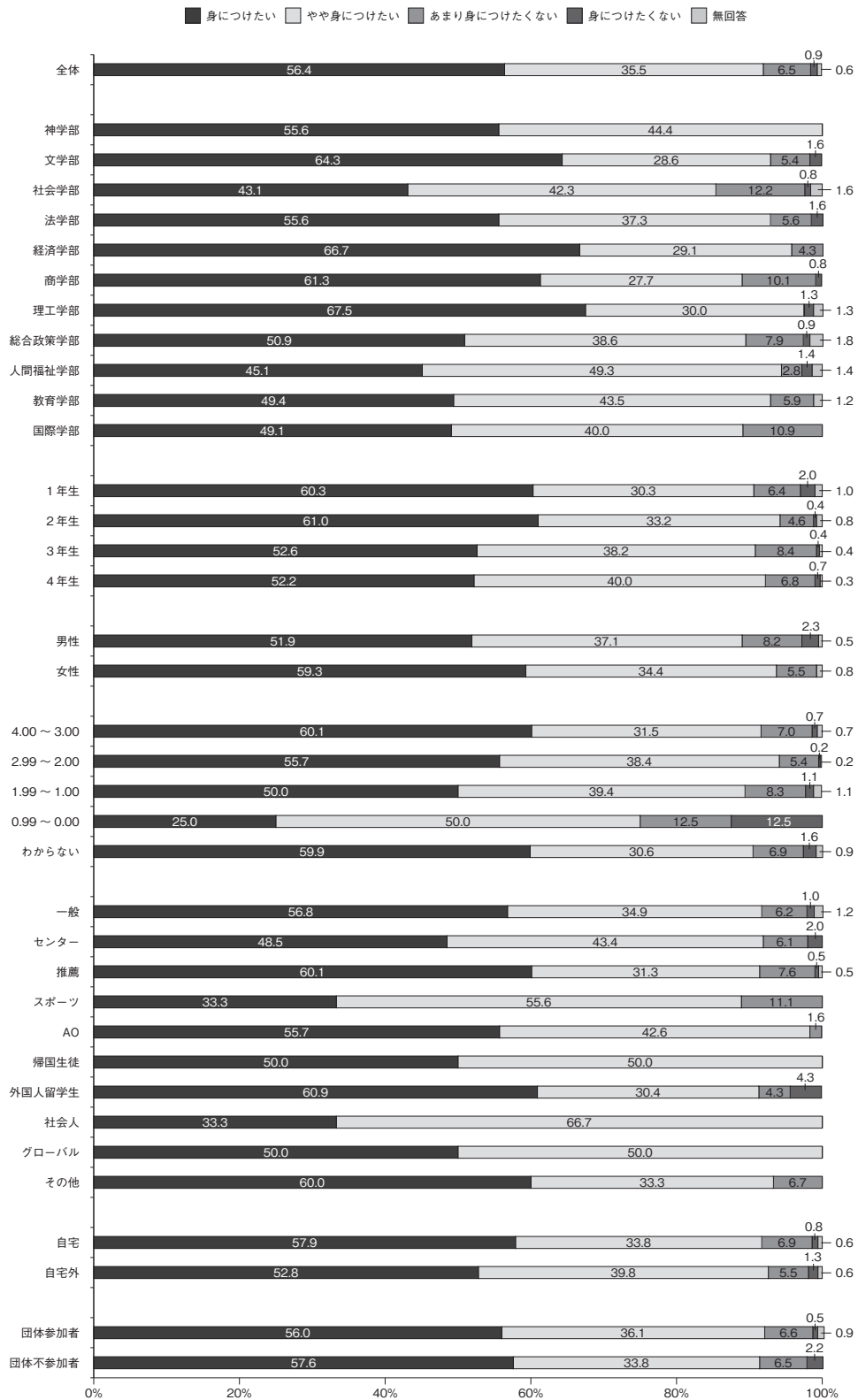
図Ⅱ-4-4 在学中に身につけたい能力 D リーダーシップ



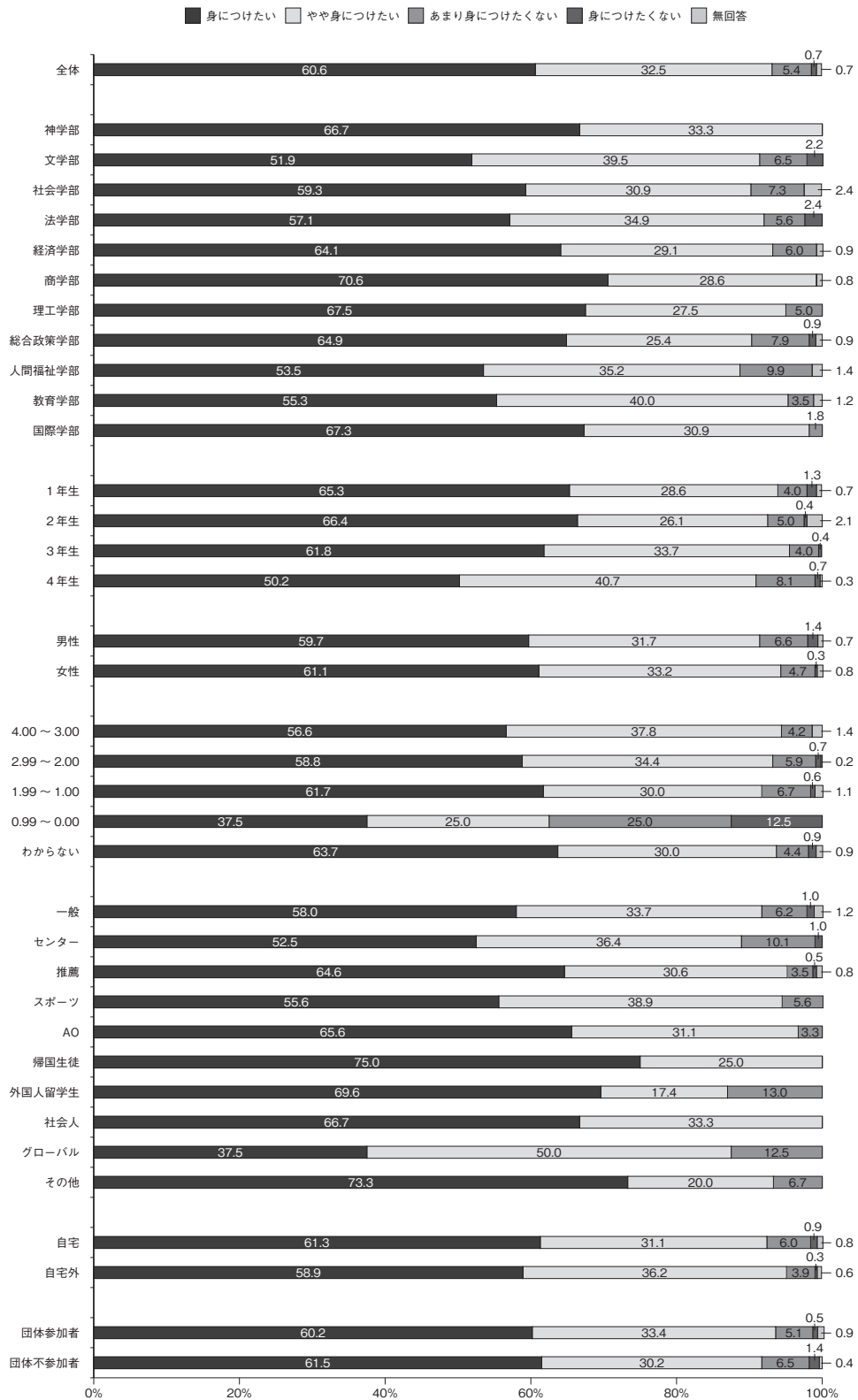
図Ⅱ-4-5 在学中に身につけたい能力 E 集団の中での協調性



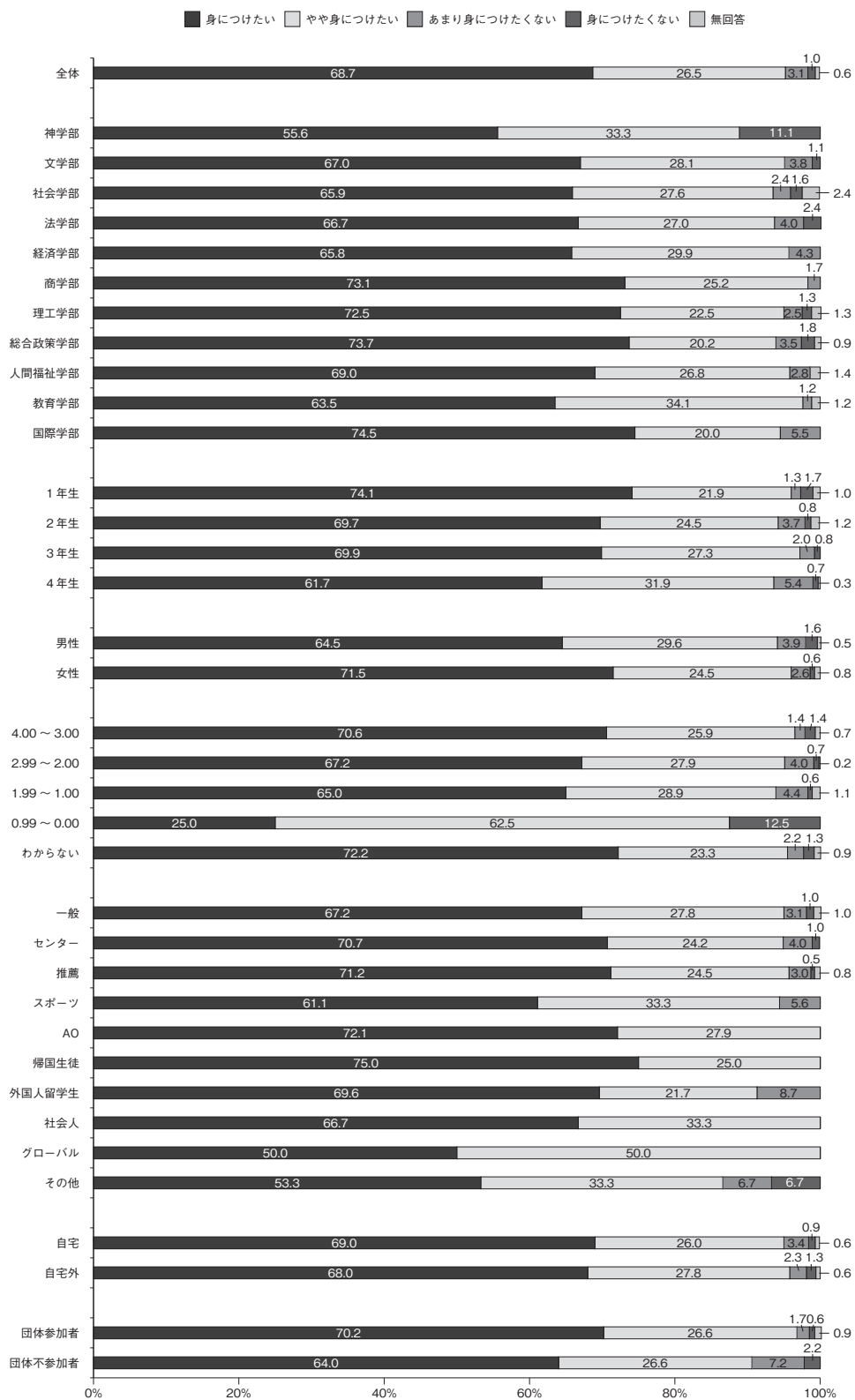
図Ⅱ-4-6 在学中に身につけたい能力 F データ処理、事務処理能力



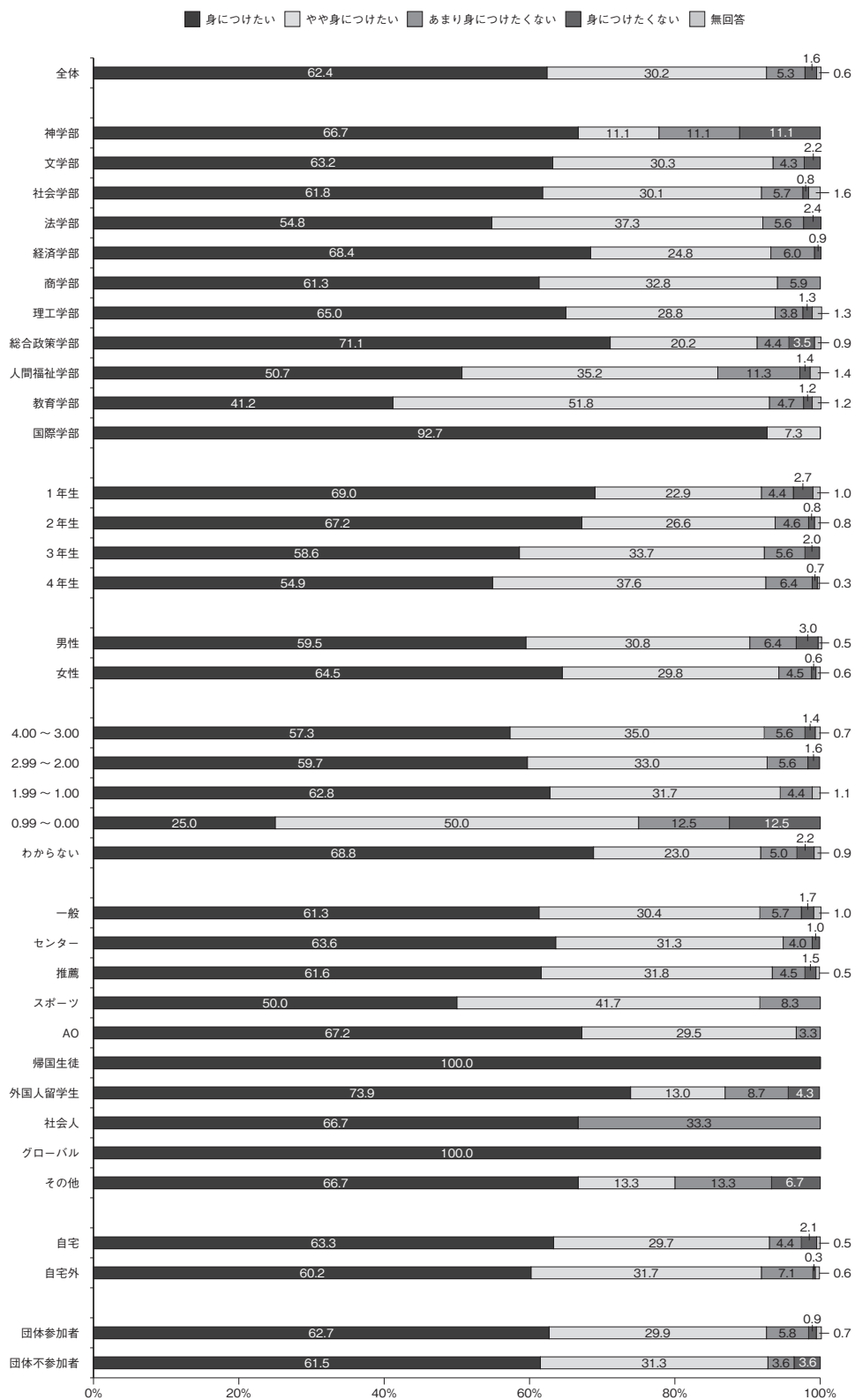
図Ⅱ-4-7 在学中に身につけたい能力 G 企画・アイデア等の創造力



図Ⅱ-4-8 在学中に身につけたい能力 H 人間関係構築力



図Ⅱ-4-9 在学中に身につけたい能力 I 外国語運用能力



## 5. 在学中にしたいこと

### Summary

約4分の1の学生が、在学中に「資格の取得」をしたいと考え、次いで「クラブ・サークル活動」、「海外プログラムへの参加」が「在学中にしたいこと」の上位となった。学部や入学試験形態によっては、「海外プログラムへの参加」が高くなる傾向がみられた。

Q 5. あなたが在学中にしたいことを2つ以内で選んで○印を付けてください。

- |                           |            |                               |
|---------------------------|------------|-------------------------------|
| 1 海外プログラム（留学・外国語研修など）への参加 | 2 資格の取得    |                               |
| 3 ボランティア活動                | 4 インターンシップ | 5 クラブ・サークル活動                  |
| 6 友人を作る                   | 7 アルバイト    | 8 その他（                      ） |

全体では、回答の多い順に「資格の取得」(25.0%)、「クラブ・サークル活動」(17.5%)、「海外プログラムへの参加」(15.6%)、「友人を作る」(11.7%)、「インターンシップ」(10.2%)、「アルバイト」(9.8%)、「ボランティア活動」(7.7%)であった。

学部別で顕著な結果となったのは、全体では「資格取得」が最も多いなか国際学部では、「海外プログラムへの参加」が最も多く、34.9%だった。国際学部では突出した結果となったが、国際政策学科を持つ総合政策学部も20.9%と高い結果となっており、在学中に全員が何らかの海外プログラムに参加するカリキュラム（国際学部）となっていることや、国際機関や企業、官公庁で実務経験を積んでいる教員がいることなど国際的な学習環境が起因していると考えられる。また、「資格取得」は多い順に神学部40.0%、商学部31.0%、文学部28.8%、教育学部28.8%となっており、各学部の教育課程によって取得できる資格を視野に入れて回答した結果と推測できる。

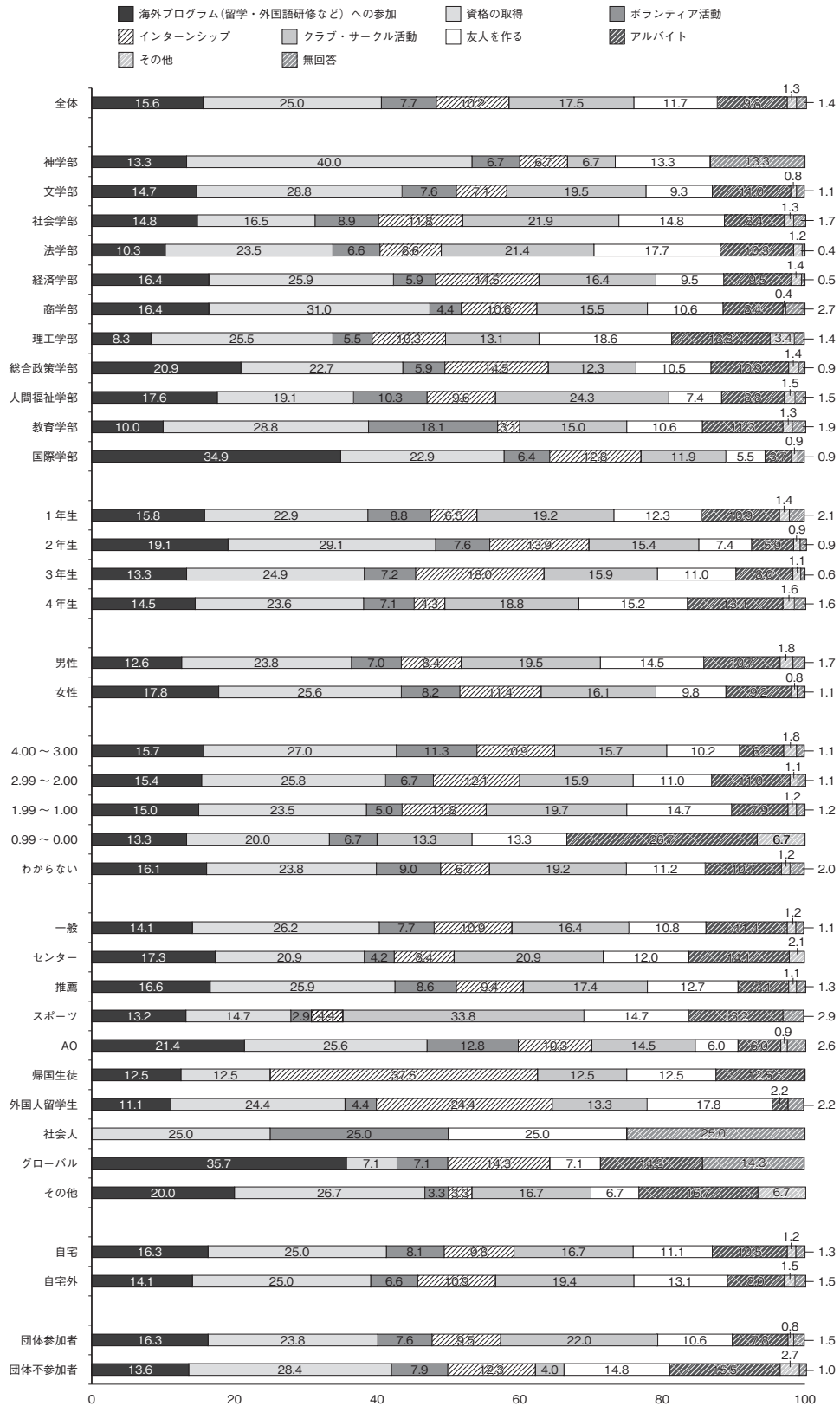
GPAの4段階別では、「資格取得」についてGPAの高い層から27.0%、25.8%、23.5%、20.0%、「海外プログラムへの参加」については15.7%、15.4%、15.0%、13.3%であるのに対し、「アルバイト」は、同じく高い層から6.2%、11.0%、7.9%、26.7%と目立った特徴が表れている。

入試区分別では、グローバル入学試験の学生は「海外プログラムへの参加」が35.7%と突出して多く、「クラブ・サークル活動」は0.0%という結果となった。本学が取り組む「実践型“世界市民”育成プログラム」への参加を条件としていることの表れと言える。スポーツ能力に優れた者のための入学試験の学生は「クラブ・サークル活動」(33.8%)、AO入学試験の学生は「資格の取得」(25.6%)「海外プログラムへの参加」(21.4%)と、入学試験形態の特徴を表した結果となった。

学内外のクラブ・サークルや団体への所属有無別では、所属している学生は「資格の取得」(23.8%)「クラブ・サークル活動」(22.0%)「海外プログラムへの参加」(16.3%)「友人を作る」(10.6%)の順となった。一方の所属していない学生は「資格の取得」(28.4%)「アルバイト」(15.5%)「友人を作る」(14.8%)「海外プログラムへの参加」(13.6%)となった。団体への所属の有無にかかわらず学生にとって「資格の取得」がもっとも在学中にしておきたいことという結果となった。



図Ⅱ-5 在学中にしたいこと



## 6. 授業区分ごとの熱心度

### Summary

言語（外国語）科目、専門科目は8割、一般教養科目は7割、キリスト教科目は4割近くの順番で、学生は「熱心に」あるいは「やや熱心に」と回答しており、真面目に取り組んでいる学生が多いことがわかる。なお、当然であるが、ゼミナール・実習や卒業論文・卒業研究は、4年生になると「熱心に」取り組む割合が増え、8割以上が「熱心に」あるいは「やや熱心に」取り組んでいる。

Q 6. あなたは大学の授業科目にどの程度熱心に取り組んでいますか。

A～Fについて、それぞれ0（該当しない）から4（熱心に取り組んでいる）までの数字を1つだけ選んで○をつけてください。

- |           |            |             |
|-----------|------------|-------------|
| A キリスト教科目 | B 一般教養科目   | C 言語（外国語）科目 |
| D 専門科目    | E ゼミナールや実習 | F 卒業論文・卒業研究 |

### A キリスト教科目

他の科目と比較して、全体的に熱心に取り組んでいない学生が多い傾向がある。その中で神学部の学生が熱心に取り組んでいるのは当然としても、社会学部の学生が熱心に取り組んでおり(25.2%)、「やや熱心に」取り組んでいる学生も合わせると6割近くの学生がこの科目に真面目に取り組んでいることがわかる。これは神学部を除く他の学部と比較しても突出した特徴である。必修の「キリスト教学」の配当年次は1年生なので、1年生が熱心に取り組む学生が多いと想定していたが、最も熱心に取り組んでいる学年が4年生であることから、カリキュラムとの関連性は薄いと考えられる。

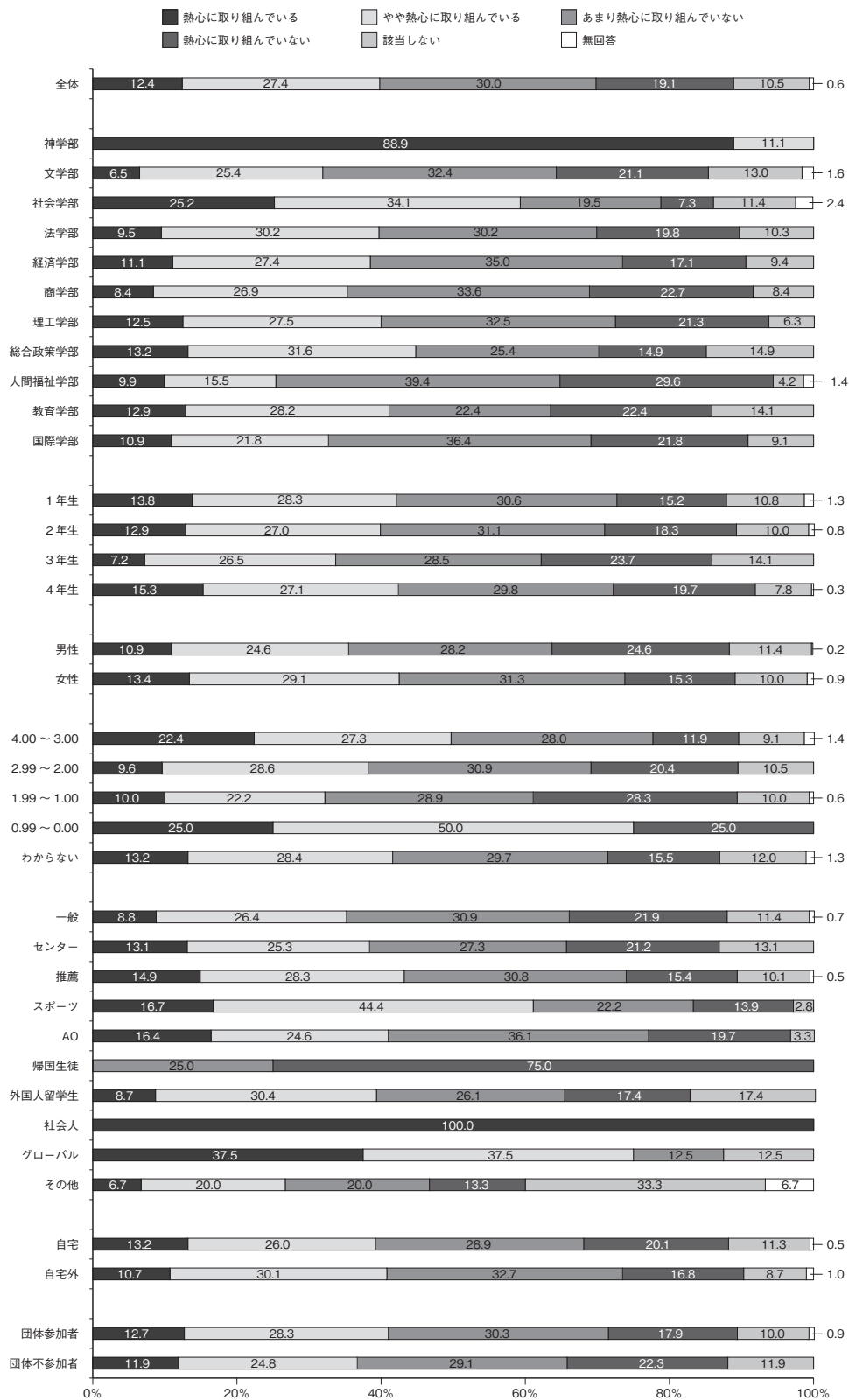
GPAでみると(図Ⅱ-6-1)成績優秀者が熱心に取り組んでいた(「やや熱心に」も含めると5割弱)傾向があるのは当然といえる。とはいえキリスト教科目は科目数自体が少ないため成績の良し悪しにあまり影響を与えないことがこの科目に対する取り組みへの不熱心さを表していると推測できる。

### B 一般教養科目

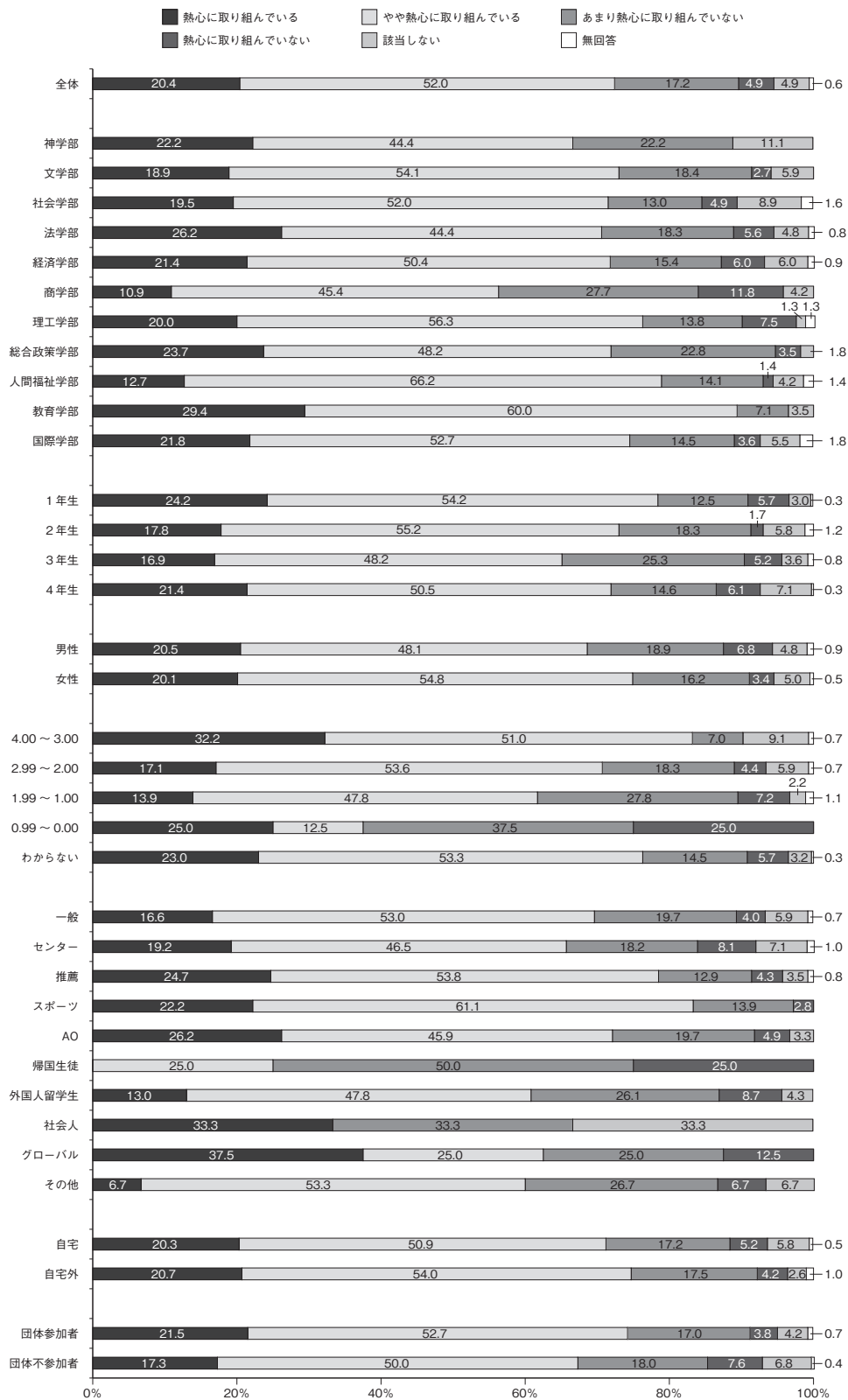
全体的に熱心に取り組んでいる学生が多いことがわかる。所属学部による回答分布からもそれぞれの学部で熱心に取り組んでいることがわかる。ただし大抵の学部で7割以上の学生が真面目に取り組んでいるが、神学部ではやや低く(「熱心に」と「やや熱心に」を合わせ66.6%)商学部ではさらに低い傾向(「熱心に」と「やや熱心に」を合わせ56.3%)を示していることがわかる。

GPAによる回答分布からは成績が優秀な学生ほど真面目に取り組んでいることがわかる。例えばGPA3.00以上の成績優秀者は(「熱心に」と「やや熱心に」を合わせて)83.2%の学生が真面目に取り組んでいる一方でGPAが1.00未満の成績不良者は37.5%と非常に低い傾向を示していることがわかる。

図Ⅱ-6-1 授業区分ごとの熱心度 A キリスト教科目



図Ⅱ-6-2 授業区分ごとの熱心度 B 一般教養科目



## C 言語（外国語）科目

8割以上の学生が「熱心に」あるいは「やや熱心に」と回答していることから全体的にかなり真面目に取り組んでいる学生が多いことがわかる。以下「熱心に」と「やや熱心に」を合わせた数値を示すことにする。所属学部による回答分布からは国際学部の96.4%を筆頭にいずれの学部も7割台後半から8割、学部によっては8割台後半という非常に高い数値を示している。これは全体的な傾向からも述べたようにこの科目群にほとんどの学生が真面目に取り組んでいることを示す証左である。GPAによる回答分布からも同様の傾向がみて取れる。ただしGPA2.00以上3.00未満の成績中位者（80.8%）およびGPA1.00以上から2.00未満の成績下位者（79.4%）においてほぼ同様の傾向を示していることが特徴的だといえる。

## D 専門科目

8割以上の学生が「熱心に」あるいは「やや熱心に」と回答していることから全体的にかなり真面目に取り組んでいる学生が多いことがわかる。以下「熱心に」と「やや熱心に」を合わせた数値を示すことにする。

所属学部の回答分布からは社会学部（72.4%）、経済学部（79.5%）および総合政策学部（78.9%）を除く学部において8割ないし9割以上の学生がこの科目群に真面目に取り組んでいることがわかる。経済学部と総合政策学部の数値はほぼ8割といってもよいが社会学部の数値について若干留意すべきであろう。

GPAによる回答分布からは、言語（外国語科目）と同様の傾向、つまりこの科目群への取り組みにおいてGPA2.00以上3.00未満の成績中位者（84.6%）とGPA1.00以上から2.00未満の成績下位者（80.5%）が同様の傾向をみせているのが特徴的である。

## E ゼミナールや実習

全体の傾向は他の科目（群）より低い結果となっているが、これはこの科目群を履修するのが3年生と4年生が中心であるため、学年によるか回答分布からわかるように回答全体に偏りが出てしまうことによるものである。そのため、「熱心に」と「やや熱心に」を合わせた数値は、3年生（88.3%）、4年生（88.8%）は高くなっており、1年生（47.8%）、2年生（44.4%）は「該当しない」に多く回答している。

所属学部による回答分布からは、教育学部が突出して高い数値（80.0%）を示しているのが特徴的である。また神学部（44.4%）や理工学部（52.5%）が低い数値を示していることに留意すべきだろう。他の学部は6割弱から7割台後半の数値を示している。

## F 卒業論文・卒業研究

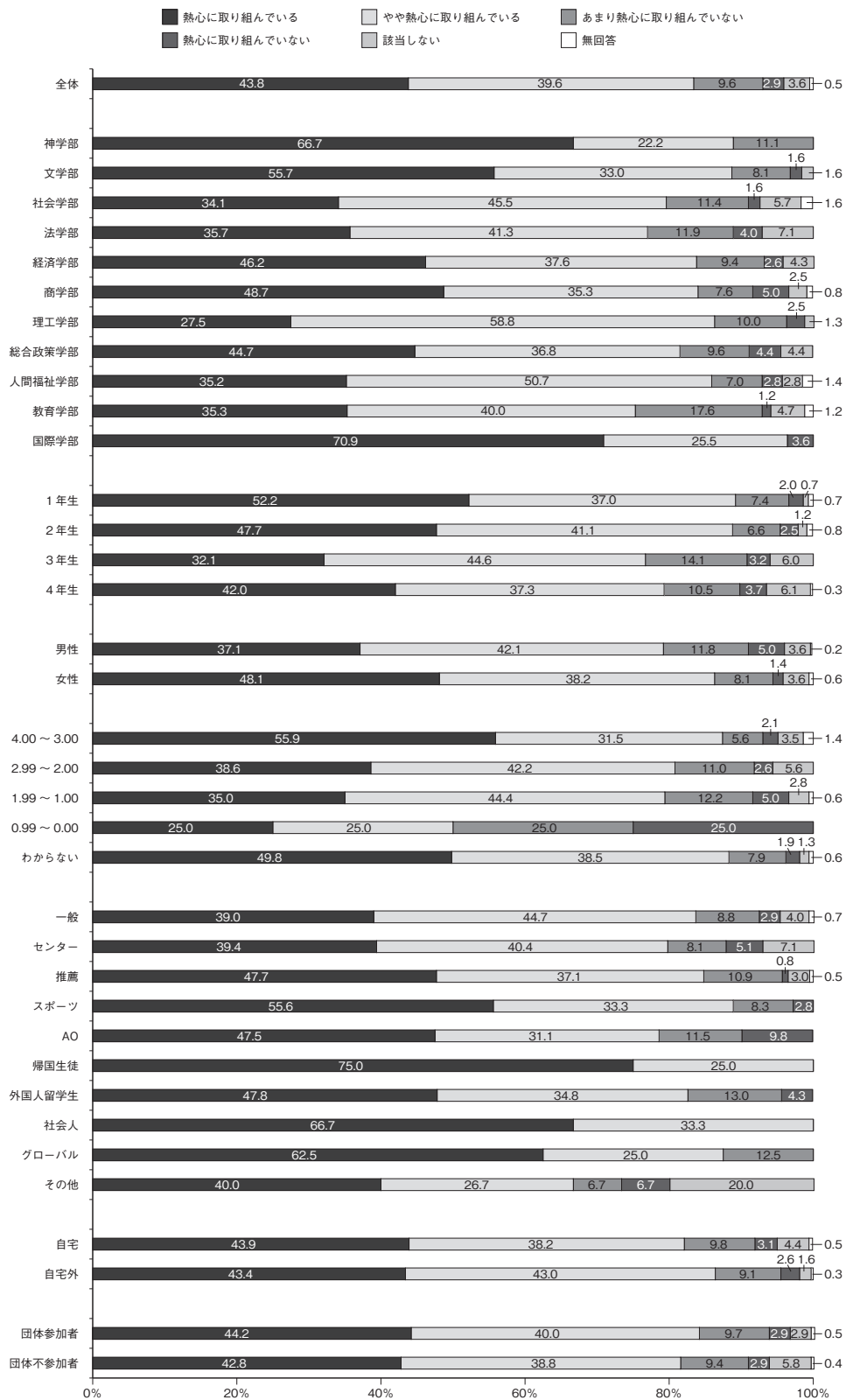
全体の傾向は他の科目（群）より低い結果となっているが、1年生～3年生以下は、「該当しない」に多くの回答があるので、当然の結果である。以下、「熱心に」と「やや熱心に」を合わせた数値を示すことにする。

所属学部により回答分布からも社会学部の41.5%を筆頭に多くの学部で4割強ないし3割台の数値を示している。また法学部は15%とかなり低い数値を示しているが、これは（他の複数の学部と同様に）卒業論文・卒業研究は必修ではない、つまり卒業要件に関係ない学部において低い数値を示してしまうのは無理ないことだと推測できる。

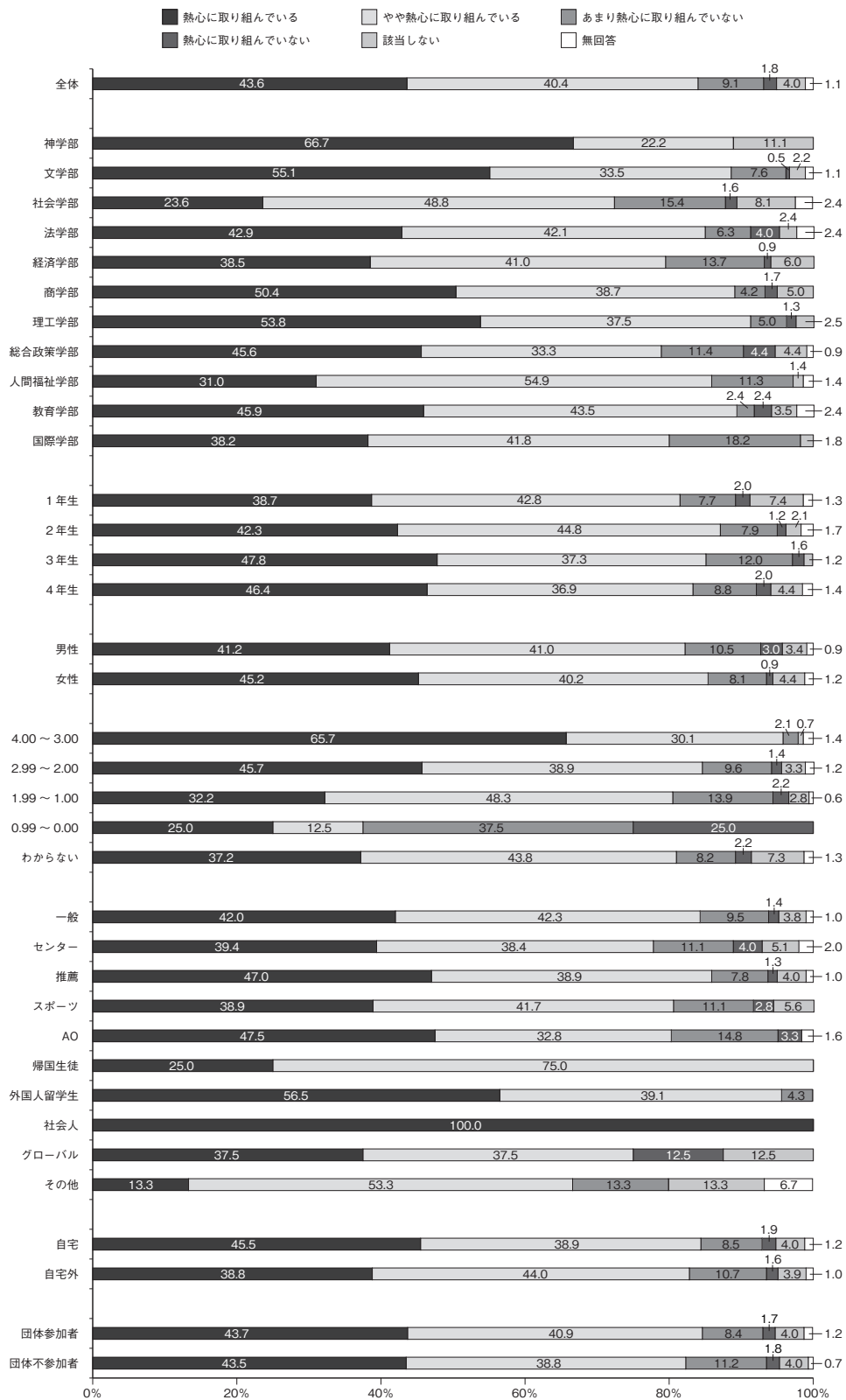
GPAによる回答分布では、GPAが高い学生ほど高い数値となっている。

学年による回答分布において4年生の回答が最も高い（82.4%）ことは科目の性格上、当然ともいえるのでそのことを言及するにとどめておく。

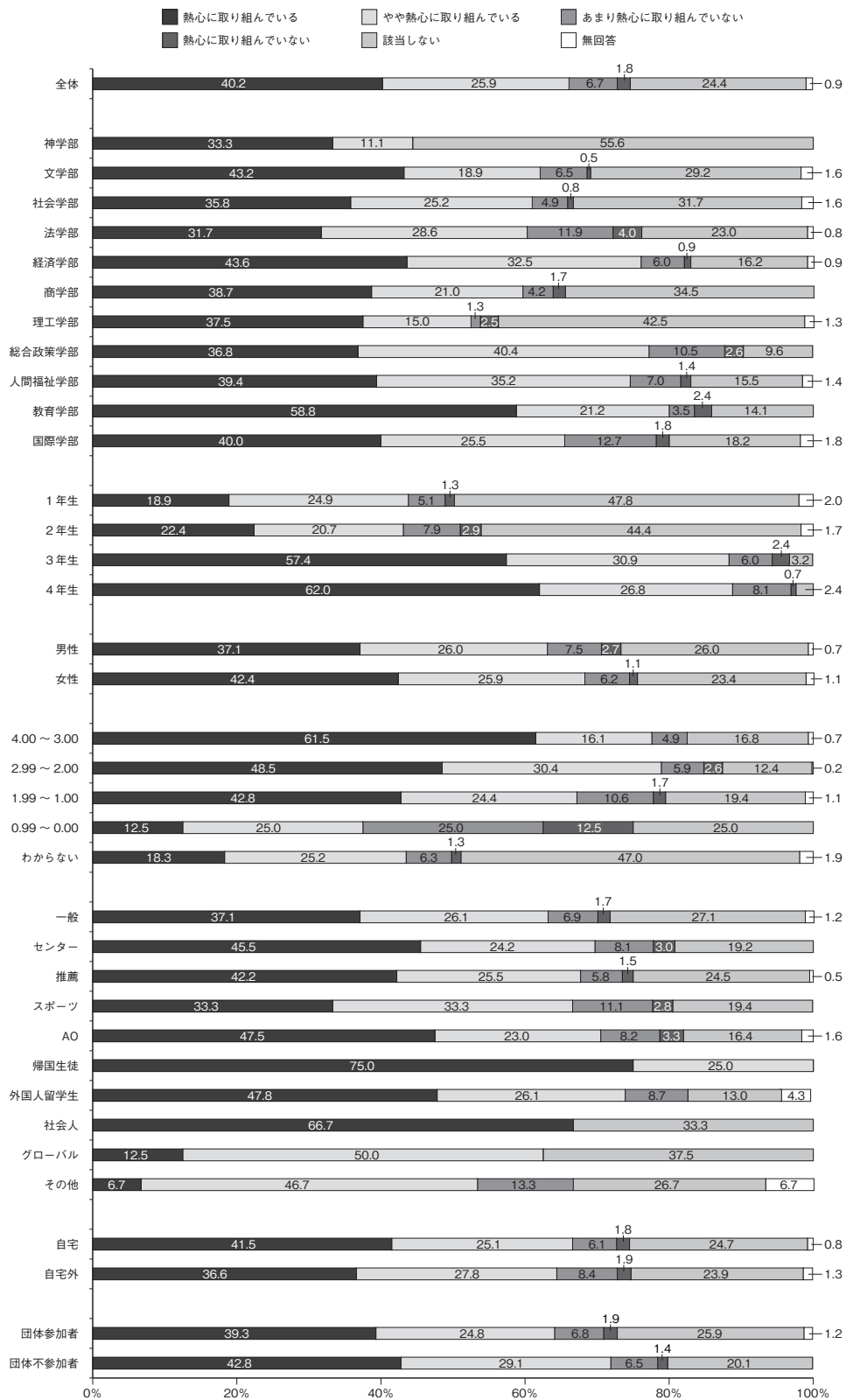
図Ⅱ-6-3 授業区分ごとの熱心度 C 言語(外国語)科目



図Ⅱ-6-4 授業区分ごとの熱心度 D 専門科目

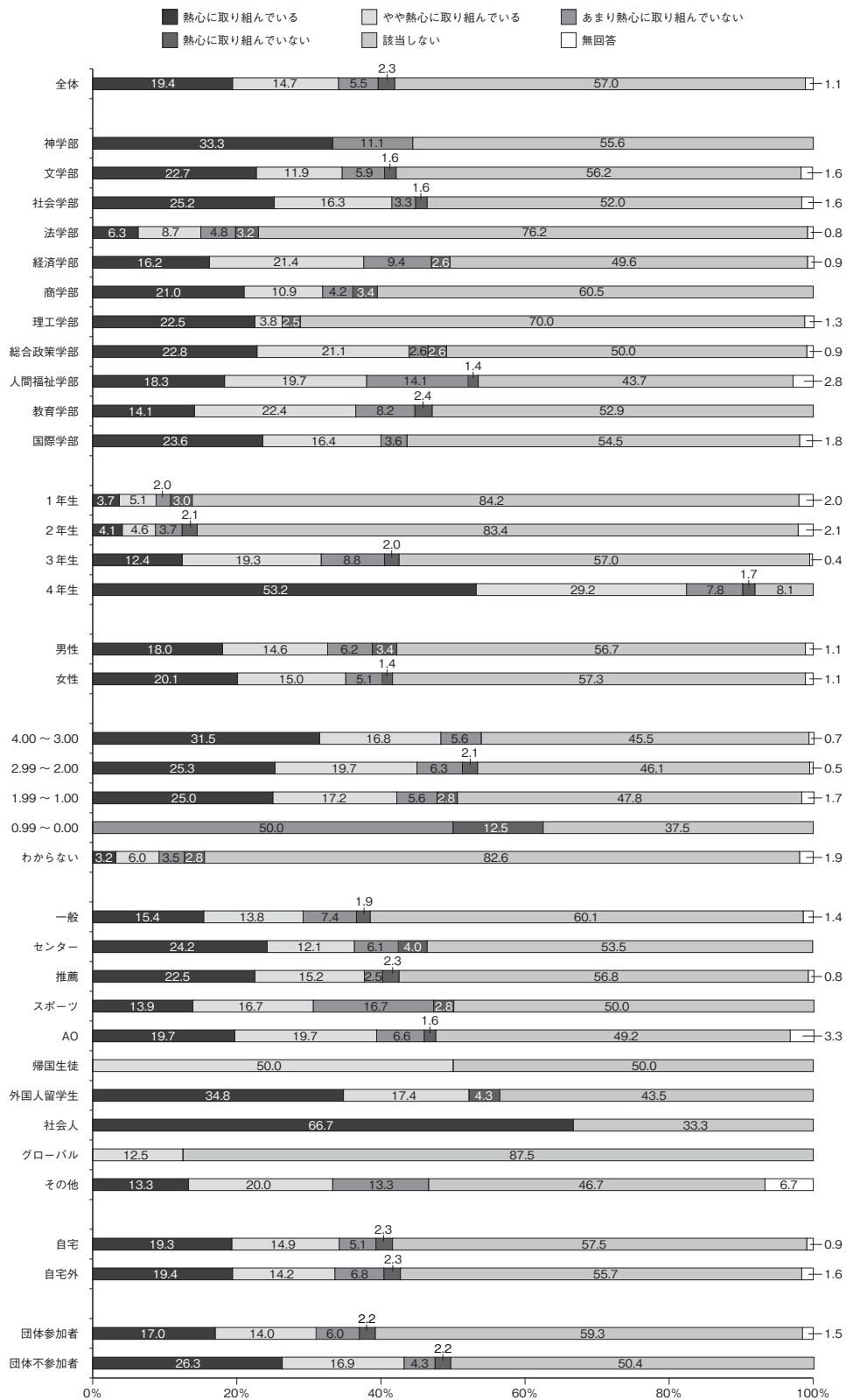


図Ⅱ-6-5 授業区分ごとの熱心度 E ゼミナールや実習





図Ⅱ-6-6 授業区分ごとの熱心度 F 卒業論文・卒業研究



## 7. 将来の夢や目標、大学における学びとの関係

### Summary

「公務員」「教員・保育士」「公認会計士」など具体的な仕事に直結した夢や目標が多かった。

また、全体の6割は将来の夢や目標と大学での学びにつながりを感じており、具体的な夢や目標を記述している学生の多くが、大学での学びにつながりを見つけると回答している。

Q 7-1. 将来の夢や目標はありますか。あれば記入してください。

Q 7-2. 将来の夢や目標と大学での学びにつながりを見つけられていますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 十分できていると思う   | 2 できているほうだと思う |
| 3 あまりできていないと思う | 4 全くできていない    |

この質問項目は、将来の夢や目標が具体化できること、そして夢や目標と大学での学びにつながりを見つけられることができることが、大学における学びの活性化につながることから設定した項目である。

自由記述において顕著なのは、「公務員」「教員・保育士」「公認会計士」など、資格取得に直結した目標を持つ学生の回答である。また、「学部における学びを活かした職業につきたい」「言語を活用した職業に就きたい」といった回答も多く見受けられた。学部別にみると、文学部、法学部、商学部、教育学部といった具体的な職業を連想しやすい学部において、学年関係なく具体的な回答が多く見受けられ、法学部は公務員、人間福祉学部は社会福祉士などの福祉職への回答が目立った。特に教育学部は小学校教員、幼稚園教諭、保育士といった具体的な職業がはっきりとした学部であることから、低学年次から具体的な目標を挙げる回答が多く見受けられた。

表Ⅱ-7 資格取得に直結した目標を記載した割合（学部別）

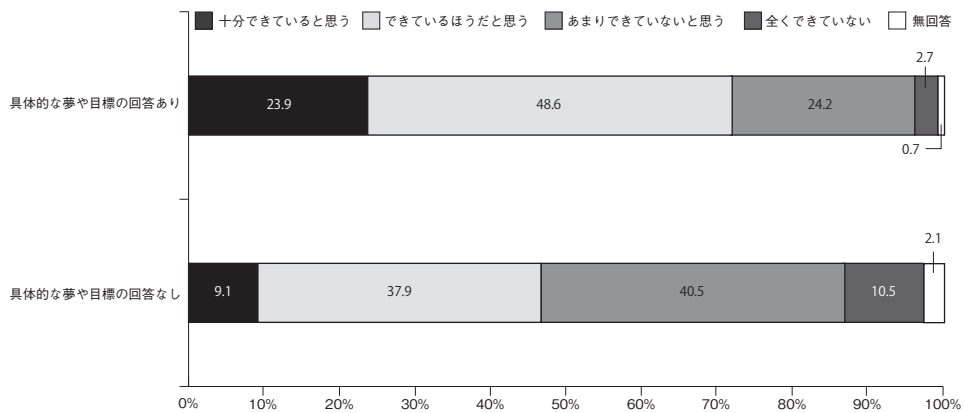
	教員*1	公務員*2	その他	合計
神学部	1	0	0	1
文学部	13	8	6	27
社会学部	2	4	0	6
法学部	3	27	7	37
経済学部	3	2	3	8
商学部	4	6	8	18
理工学部	7	1	1	9
総合政策学部	4	6	6	16
人間福祉学部	0	5	9	14
教育学部	56	1	1	58
国際学部	0	2	1	3
合計	93	62	42	197

\*1 幼稚園・保育士等を含む \*2 警察、裁判所職員等を含む

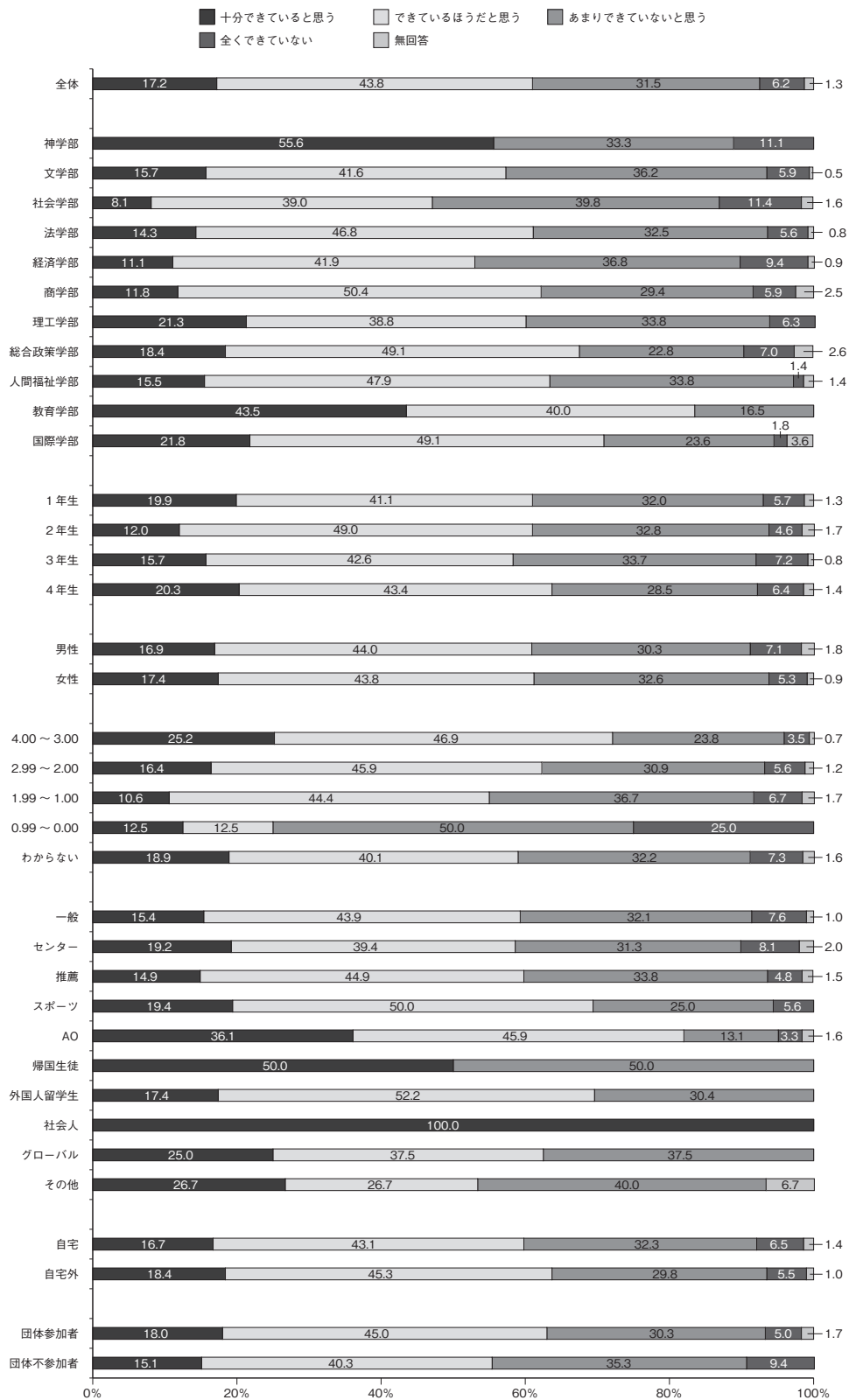
学年別にみると、職業には結びつかないが夢を自由記述する学生が多いのが2年生であり、3年生になるとそれが具体的な職業へと目標化している。4年生になると夢や目標の記述は少なくなる。

Q7-1とQ7-2との関係性においては、具体的な夢や目標を記述している学生の多くが大学での学びにつながりを見つけられることができると回答している。具体的な夢や目標を記述している学生の72.5%が「十分できていると思う」「できているほうだと思う」と回答している一方、無回答もしくは「なし」と回答している学生の場合、47.0%まで低下する。しかしながら、これも具体的な職業を連想しやすい学部において顕著であり、他の学部においては明確に表れていない場合もある。学年別にみると、2年生、3年生で具体的な夢や目標を記述する回答と大学での学びにつながりを見つけられることができる回答がやや多いという結果となった。

図Ⅱ-7-1 具体的な夢や目標の記載有無による回答差



図Ⅱ-7-2 将来の夢や目標、大学における学びとの関係



## 8. 関西学院大学に対する帰属意識や満足度など

### Summary

全体では「はい」が66.7%の回答であった。学年が進行するほど「はい」の割合が高くなった。また、女性（69.6%）の方が、男性（62.6%）よりも「はい」の割合が高い結果となった。

一般入学試験やセンター利用入学試験など、他の入試種別と比較して、本学への第一希望の割合が少ない入試種別においても、相対的に高い割合になっている。また、団体参加者の方が「はい」の割合が高く、多くの学生にとって団体に所属するかどうか、満足度や帰属意識を大きく左右させる要因になっている。

Q 8. 高校生に戻って進学をすればしたら、関西学院大学を選択しますか。

- 1 はい                    2 いいえ

進学先としてもう一度本学を選択するかどうかを聞くことによって、現在の学生生活への満足度や本学への帰属意識や大学への関わりなども測っている。

全体では、「はい」（66.7%）、「いいえ」（31.1%）という結果になった。前回の調査では「兄弟姉妹や親しい友人・後輩に勧めるか」を尋ね、「勧める」と回答した学生は68.4%であったため、設問を変更し、回答率に変化があるか確認したが、ほぼ変化がない結果となった。

学年別では、1年生から4年生に学年進行に伴い、「はい」の割合は上昇している。Q11-2の結果（本学を第一志望にしている割合は、全体では約6割（58.3%））にあるように、入学当初は、他大学に進学したいと考えていたが、Q1での結果にあるように、学生生活の満足度（約8割以上の学生が、「満足している」もしくは「やや満足している」と回答）や本学での学びを通じて、上昇しているのはいかと思える。特に、Q11-2にあるように、一般入学試験では第一志望が36.6%、センター利用入学試験では第一志望が8.1%となっている中で、一般入学試験では56.3%、センター利用入学試験では41.4%の学生が、本学を選択するという結果は、特筆すべき事項と考えられる。また、受験当時に本学を第1希望にしている学生が、高校生に戻って進学しても本学を選択するという割合が高いことに加え、表Ⅱ-8にあるように、受験当時に本学を第2希望にしている学生が、入学後の満足度や帰属意識の上昇により、一般入学試験で約半数（45.1%）、センター利用入学試験で約6割（60.6%）が高校生に戻って進学しても本学を選択するという点も、非常に興味深い結果となった。

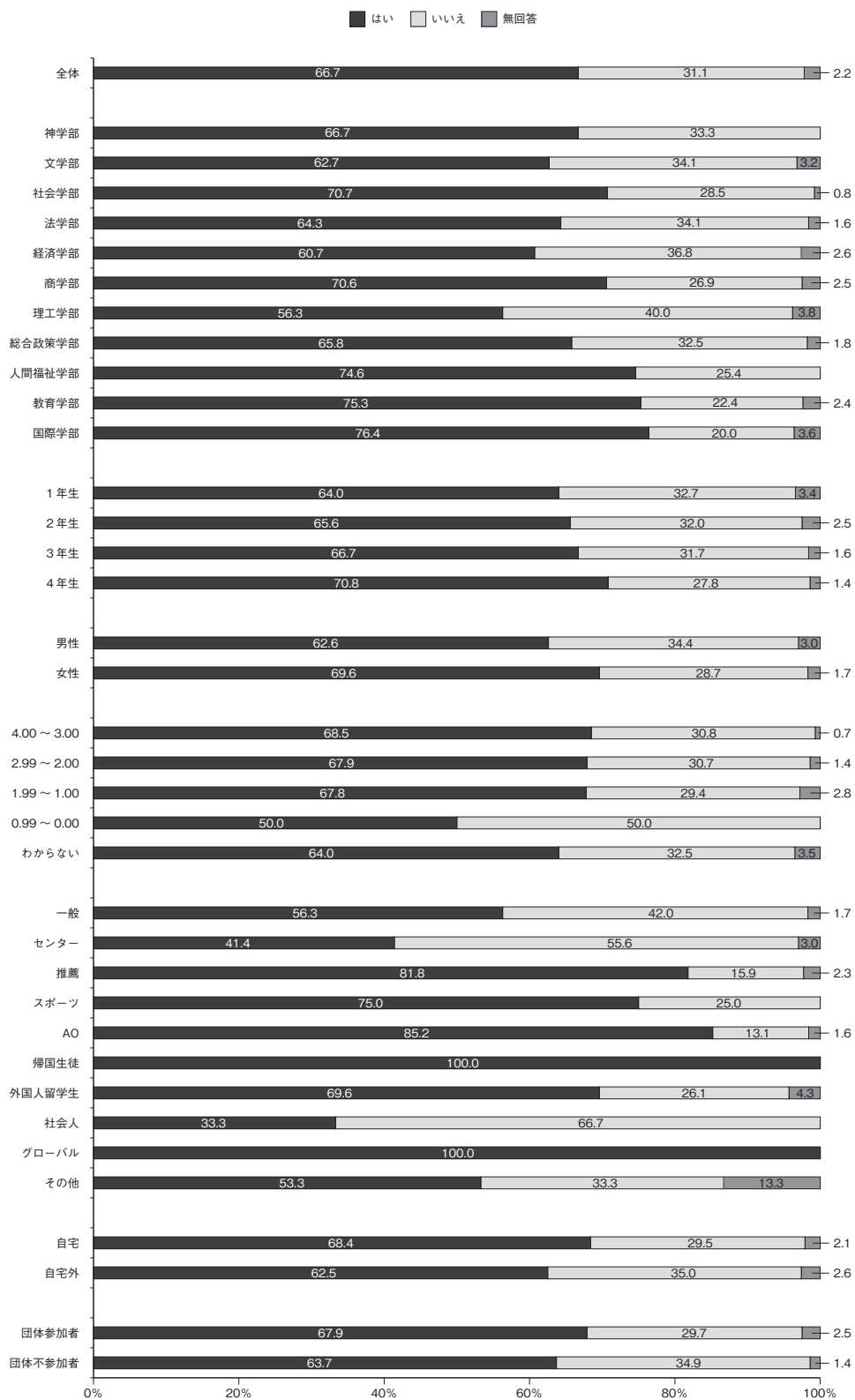
また、男女別では、女性（69.6%）の方が、男性（62.6%）よりも7ポイント高い結果となっている。

最後に、団体参加別では、参加している学生の方が、4ポイント以上高い結果となっており、Q1でも記載したように、多くの学生にとって団体に所属するかどうかは学生生活の満足度や帰属意識を大きく左右する要因であると推測できる。

表Ⅱ-8 高校に戻って進学する場合、本学に進学を希望する割合（入試種別ごと）

入試種別	Q11-2	はい	いいえ	無回答
一般入学試験	第1希望	0.85	0.14	0.01
	第2希望	0.45	0.54	0.01
	その他	0.33	0.66	0.01
	無回答	0.00	0.00	1.00
一般入学試験 集計		0.56	0.42	0.02
センター利用入学試験	第1希望	0.63	0.38	0.00
	第2希望	0.61	0.39	0.00
	その他	0.29	0.70	0.02
	無回答	0.00	0.00	1.00
センター利用入学試験 集計		0.41	0.56	0.03
推薦入学試験	第1希望	0.85	0.14	0.01
	第2希望	0.70	0.27	0.03
	その他	0.50	0.50	0.00
	無回答	0.00	0.00	1.00
推薦入学試験 集計		0.82	0.16	0.02
スポーツ推薦入学試験	第1希望	0.76	0.24	0.00
	第2希望	0.50	0.50	0.00
	その他	1.00	0.00	0.00
	無回答	—	—	—
スポーツ推薦入学試験 集計		0.75	0.25	0.00
AO入学試験	第1希望	0.91	0.09	0.00
	第2希望	0.50	0.50	0.00
	その他	0.67	0.33	0.00
	無回答	0.00	0.00	1.00
AO入学試験 集計		0.85	0.13	0.02
帰国生徒入学試験	第1希望	1.00	0.00	0.00
	第2希望	1.00	0.00	0.00
	その他	1.00	0.00	0.00
	無回答	—	—	—
帰国生徒入学試験 集計		1.00	0.00	0.00
外国人留学生入学試験	第1希望	0.86	0.14	0.00
	第2希望	0.50	0.33	0.17
	その他	0.33	0.67	0.00
	無回答	—	—	—
外国人留学生入学試験 集計		0.70	0.26	0.04
社会人入学試験	第1希望	1.00	0.00	0.00
	第2希望	—	—	—
	その他	0.00	1.00	0.00
	無回答	—	—	—
社会人入学試験 集計		0.33	0.67	0.00
グローバル入学試験	第1希望	1.00	0.00	0.00
	第2希望	1.00	0.00	0.00
	その他	—	—	—
	無回答	—	—	—
グローバル入学試験 集計		1.00	0.00	0.00
その他	第1希望	0.56	0.33	0.11
	第2希望	0.67	0.33	0.00
	その他	0.50	0.50	0.00
	無回答	0.00	0.00	1.00
その他 集計		0.53	0.33	0.13

図Ⅱ-8 高校に戻って進学する場合、本学に進学を希望する割合



## 9. スクールモットーの理解度

### Summary

全体の76.9%は、スクールモットー“Mastery for Service”の意味を「説明できる」「少し説明できる」という回答であった。特に国際学部では、半数以上が「説明できる」と回答しており、同学部の意識の高さが伺われる。

Q 9. あなたは、スクールモットー“Mastery for Service”の意味を説明できますか。

最もあてはまるものに、1 つだけ○をつけてください。

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 説明できる     | 2 少し説明できる |
| 3 あまり説明できない | 4 説明できない  |

スクールモットーの理解度に関する質問は、前回調査（2012年）に続く2回目の調査である。

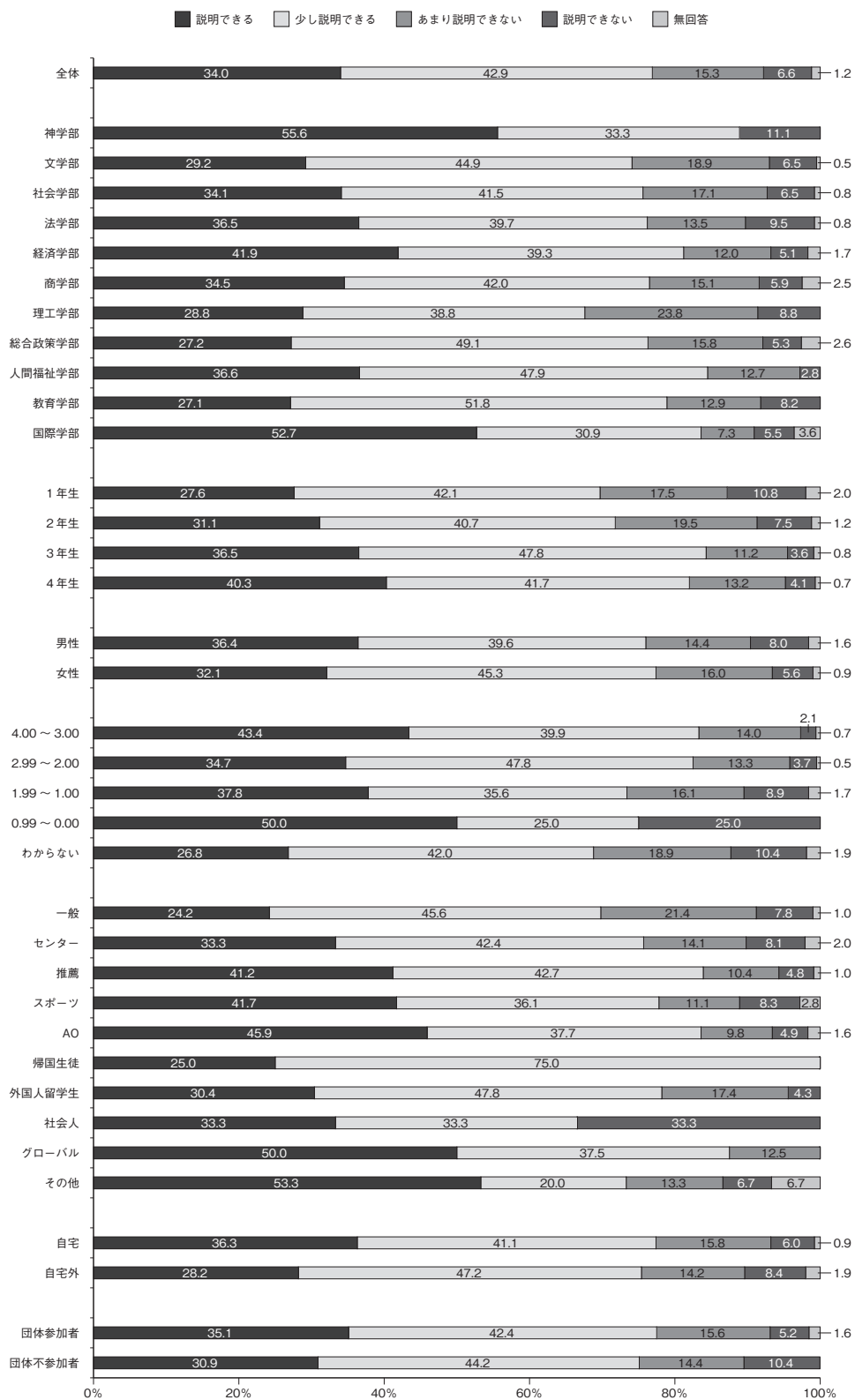
前回は「スクールモットー“Mastery for Service”の意味を理解しているか」の質問に「よく理解している」27.7%、「まあまあ理解している」56.6%で、84.3%が理解しているという回答だった。全体の8割強が理解しているという結果が出たことを受けて、今回は、可能な限り主観性を排した回答を得ることを目的に質問の仕方を「スクールモットー“Mastery for Service”の意味を説明できるか」に変更した。

回答者全体で見ると、「説明できる」34.0%、「少し説明できる」42.9%で、「（“Mastery for Service”の意味を）説明できる」と「少し説明できる」の合計は76.9%だった。前回調査より7.4%減少したが、他者に対しておよそ77%が“Mastery for Service”の意味を説明できると答えた。

学部別で見ると、「説明できる」との回答率が全体平均34.0%を上回っているのは、神学部（55.6%）、社会学部（34.1%）、法学部（36.5%）、経済学部（41.9%）、商学部（34.5%）、人間福祉学部（36.6%）、国際学部（52.7%）で、前回調査と同様に、神学部生と国際学部生の理解度の高さが際立っている。「少し説明できる」との回答率が全体平均42.9%を上回っているのは、文学部（44.9%）、総合政策学部（49.1%）、人間福祉学部（47.9%）、教育学部（51.8%）で、教育学部がもっとも理解度が高かった。「説明できる」と「少し説明できる」の合計では、神学部（88.9%）、経済学部（81.2%）、人間福祉学部（84.5%）、教育学部（78.9%）、国際学部（83.6%）が平均76.9%を上回った。特に、国際学部は「少し説明できる」（30.9%）よりも「説明できる」（52.7%）の回答率が高い結果となっている。



図Ⅱ-9 スクールモットーの理解度



## 10. 関西学院の使命

### Summary

85.5%の学生が、関西学院が「“Mastery for Service” を体現する世界市民」の育成を使命としていることを知っており、認知度は前回調査時よりも、約7ポイント上昇している。

Q10. あなたは関西学院が「“Mastery for Service” を体現する世界市民」の育成を使命としていることを知っていますか。

- 1 知っている                      2 知らない

関西学院が「“Mastery for Service” を体現する世界市民」の育成を使命としていることを知っているかとの質問は前回に続く2回目の調査項目である。

今回回答者では、85.5%の学生が「知っている」と答えている。前回調査の78.6%から6.9%アップした。

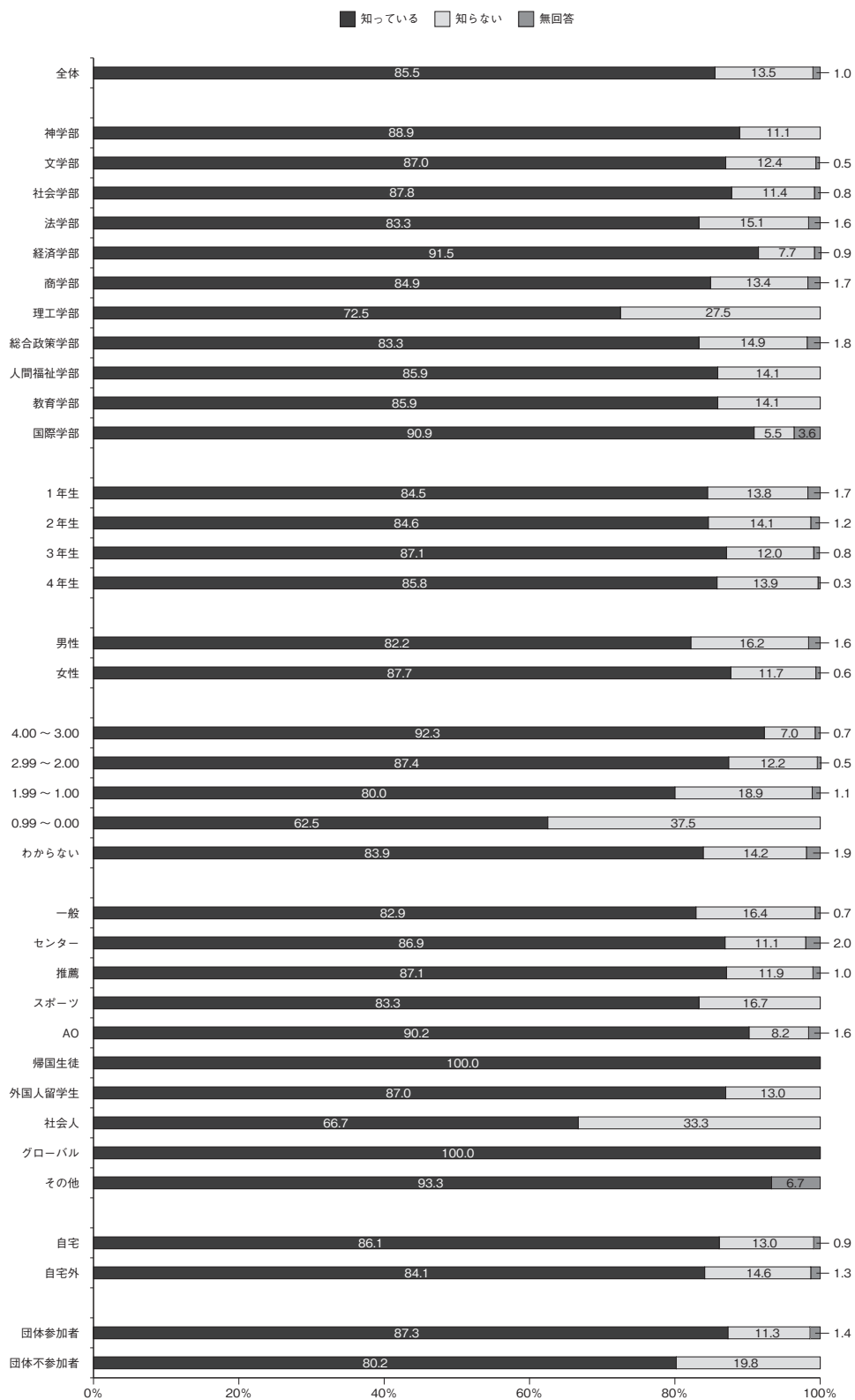
学部別では、「知っている」の全体平均85.5%を上回っているのは神学部(88.9%)、文学部(87.0%)、社会学部(87.8%)、経済学部(91.5%)、人間福祉学部(85.9%)、教育学部(85.9%)、国際学部(90.9%)だった。この項目でも、国際学部生の認知度の高さが際立った。

全体平均より高い数値が出ている学部が前回調査では4学部だったのに対し、今回調査では7学部に増加している。このようななかで、理工学部の「知っている」72.5%、「知らない」27.5%は、前回調査の「知っている」62.2%、「知らない」37.8%より改善してはいるものの、全学的に好転しているなかでは、なお課題が残ると言える。

入試形態別では、「知っている」の全体平均85.5%に対して「センター利用入学試験」86.9%、「推薦入学試験」87.1%、「AO入学試験」90.2%、「外国人留学生入学試験」87.0%が上回った。とりわけ「帰国生徒入学試験」と「グローバル入学試験」は、それぞれ回答者の実数が4名、8名ときわめて少数ではあるものの、いずれも「知っている」が100.0%だった。

課外活動団体に所属しているかどうかでの比較では、所属している学生は87.3%、所属していない学生は80.2%で、所属している学生のほうが7.1%高かった。

図Ⅱ-10 関西学院の使命の認知度



## 11. 関西学院大学に入学を決めた最も重視した理由

### Summary

入学を決めた理由は、「ブランド」(16.5%)、「教育内容」(15.9%)、「校風」(10.6%)、「偏差値」(9.3%)の順となった。「教育内容」については、男女差で最も差が大きい項目であり、女性が強く重視している傾向がみられた。また、GPAでは上位層が「教育内容」を重視していたことがわかった。なお、入試種別では入試の特徴がそれぞれ出ている結果となった。

Q11-1. あなたが関西学院大学に入学を決める際、最も重視した理由は何ですか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |       |          |          |         |
|-------|----------|----------|---------|
| 1 偏差値 | 2 受験科目   | 3 教育内容   | 4 教員    |
| 5 資格  | 6 就職に有利  | 7 ブランド   | 8 キャンパス |
| 9 校風  | 10 通学が容易 | 11 周囲の薦め | 12 その他  |

全体では「ブランド」(16.5%)、「教育内容」(15.9%)、「校風」(10.6%)、「偏差値」(9.3%)の順となった。昨年度も同様の質問項目があったが、複数選択であったことや、「ブランド」「校風」という選択肢がなかったために、単順に比較することができない。しかし、「教育内容」や「社会的評価」など類似の項目が選択の上位に来ていることは同じである。また、「偏差値」も今年度同様、昨年度も4位に位置し、大学入学決定の重要な要素として存在している。

学部別では、法学部や経済学部、商学部では「就職に有利」という項目が、人間福祉学部や教育学部では「資格」が上位に来ているところなどは学部の特徴が出ているように思われる。

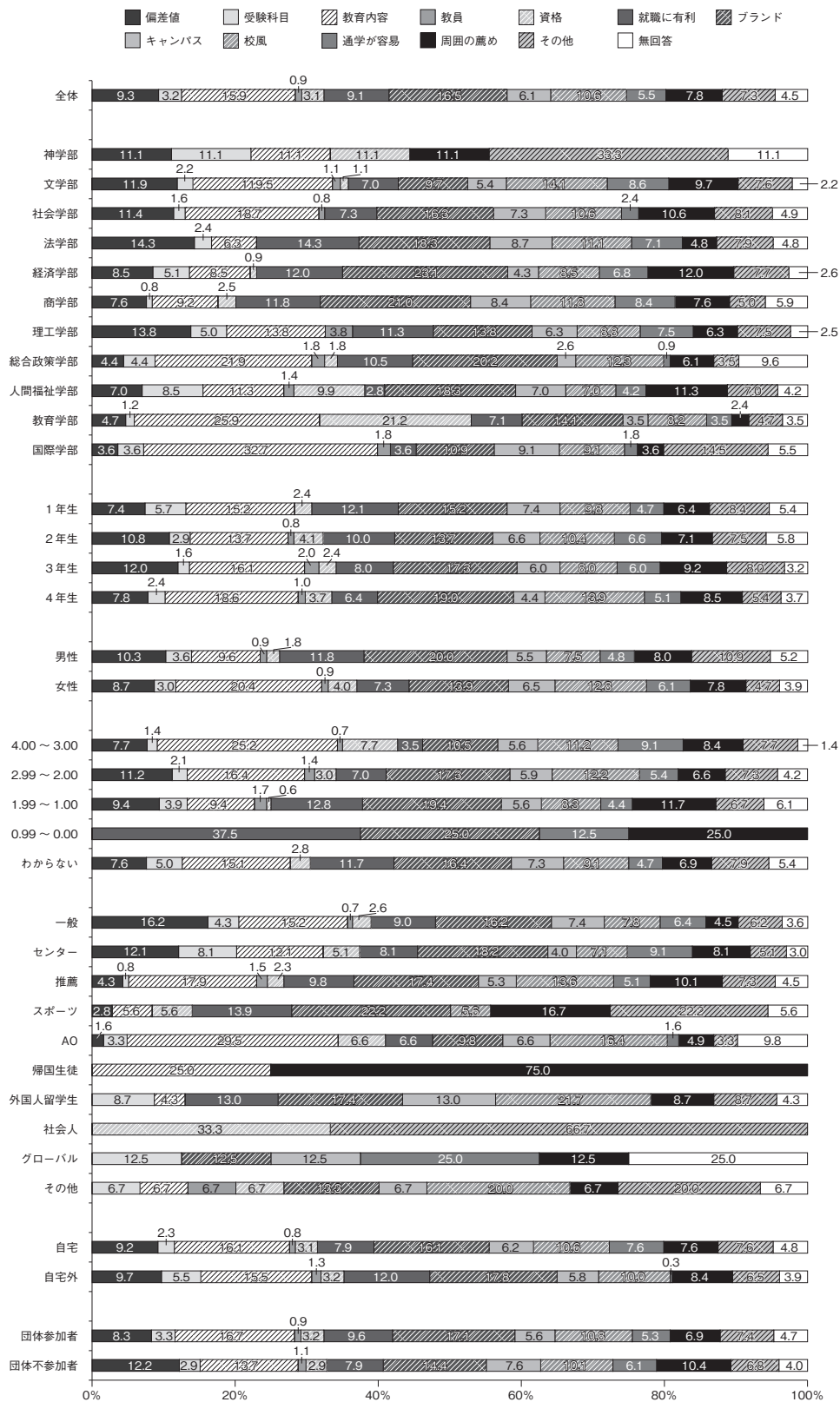
次に男女別では、男性は「ブランド」(20.0%)、「就職に有利」(11.8%)、「偏差値」(10.3%)の順で、女性は「教育内容」(20.4%)、「ブランド」(13.9%)、「校風」(12.8%)という結果となり、性差がみられた。なお、女性の2割が回答し、結果的に1番回答の多かった「教育内容」は、男性では9.6%しかなく、その差は一番大きかった。

GPA別では、GPA上位層では、「教育内容」、「ブランド」、「校風」の割合が高くなっており、特にGPA4.00~3.00では、「教育内容」(25.2%)が最も高い結果となった。また、それ以外の層では「ブランド」は同様であるが、「就職に有利」、「周囲の薦め」という回答が多くなる結果となり、GPA上位者とそれ以外での選択理由に差がみられた。

最後に、入試区分では、一般入学試験やセンター利用入試など、学力試験のみで入学した層では、「ブランド」、「教育内容」、「偏差値」が上位であった。推薦入学試験やAO入学試験では、その試験の特性上、本学を第一志望としていることから、「教育内容」、「校風」、「ブランド」が上位になる結果となった。なお、スポーツ入学試験では、「周囲の薦め」や「就職に有利」という回答が他の入試種別と比較すると多い結果となった。

なお、「その他」の回答には「内部入学」、「継続校だから」という回答を除くと、「留学等のプログラムの充実」が最も多く、次いで「クラブ活動が強い・盛ん」が上がっていた。それ以外にも「キリスト教主義」、「奨学金の充実」、「オープンキャンパスで惹かれた」、「関西であること」、「ここしかない」などの回答が寄せられた。

図Ⅱ-11 本学に入学決めた最も重視した理由



## 12. 関西学院大学の志望順位

### Summary

全体では約6割（58.3%）が本学を第一志望にしている結果となった。ただし、一般入学試験では第一志望は36.6%しかなく、前回と比較して第一志望の割合は低下している。居住形態別では、自宅生（60.8%）の方が、自宅生外（52.4%）の割合よりも多く、距離的遠近による本学の認知度や親近感の違いが要因と推測される。

Q11-2. あなたの関西学院大学の志望順位は何番目でしたか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

1 第一志望                  2 第二志望                  3 それ以外

全体では、第一志望（58.3%）、第二志望（22.3%）、それ以外（18.3%）という結果となった。この結果は前回調査と比較をすると、第一志望が1.4ポイント減少、第二志望が1.8ポイント増加、それ以外が1.5ポイント減少となっており、第二志望の割合がやや増加した結果となった。

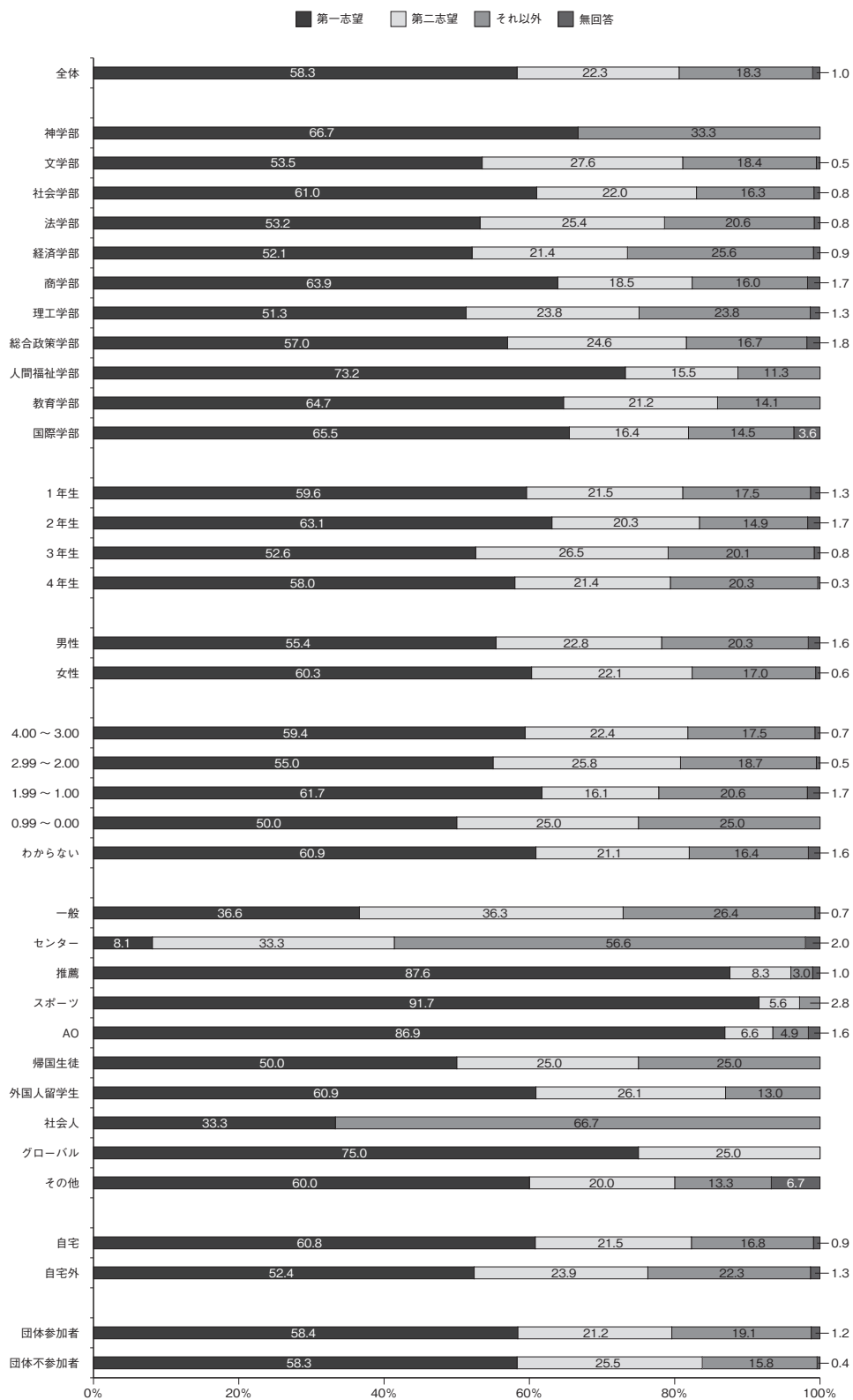
学年別にみると、3年生の第一志望が52.6%、第二志望が26.5%、それ以外が20.1%と他の学年と比較すると、第一志望の割合が低い結果となっている。これは3年生が受験をした2012年度一般選抜入試において例年に比べて、広く合格者を出したため志望順位の低い層も多く入学している結果ではないかと推測される。

男女別にみても、男性では第一志望が55.4%であるが、女性では第一志望が60.3%と前回調査比で男性の第一志望度が2.9ポイント減少しており、男女の第一志望度の差が一層開く結果となった。

次に、入試区分別にみても。一般入学試験では第一志望が36.6%、第二志望が36.3%、それ以外が26.4%、センター利用入学試験では第一志望が8.1%、第二志望が33.3%、それ以外が56.6%となり、一般入学試験、センター利用入学試験ともに第一志望度がそれぞれ3.9ポイント、8.4ポイント減少している。本学の難易度上昇に伴う国公立大学との併願層が増加している結果と推測される。他方、推薦入学試験では第一志望が87.6%、第二志望が8.3%、それ以外が3.0%、AO入学試験では第一志望が86.9%、第二志望が6.6%、それ以外が4.9%となっている。

最後に居住形態別では、自宅生は、第一志望60.8%、第二志望21.5%、それ以外16.8%、自宅外生は、第一志望52.4%、第二志望23.9%、それ以外22.3%となっており、自宅生の方が自宅外生よりも第一志望度が高い結果となっている。これは距離的に近い方が本学の認知度や親近感が高いということであろう。

図Ⅱ-12 本学の志望順位



## 13. 第一志望の大学とその理由

### Summary

第一志望としていた大学のうち、最も多かったのは「神戸大学」(26.3%)であった。本学を第一志望としていない回答者の約8割が国公立大学を第一志望としており、神戸大学(26.3%)、大阪市立大学(10.7%)、大阪大学(8.4%)、神戸市外国語大学(4.3%)と、この4大学でほぼ半数を占める結果となった。なお、私立では、同志社大学(6.6%)、慶應義塾大学(3.2%)、早稲田大学(1.8%)という結果であった。

Q11-3. Q11-2. で、2か3を選んだ方にお聞きます。

あなたの第一志望であった大学名をお聞かせください。

大学名( ) 大学

また、その大学を第一志望としていた理由として、最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |       |          |          |         |
|-------|----------|----------|---------|
| 1 偏差値 | 2 受験科目   | 3 教育内容   | 4 教員    |
| 5 資格  | 6 就職に有利  | 7 ブランド   | 8 キャンパス |
| 9 校風  | 10 通学が容易 | 11 周囲の薦め | 12 その他  |

図Ⅱ-13-1にあるように回答者の約80%が国公立大学を第一志望としており、本学を第一志望としていなかった回答者が第一志望としていた大学名を、回答数の多い順にならべたものが表Ⅱ-13である。国公立では、神戸大学(26.3%)、大阪市立大学(10.7%)、大阪大学(8.4%)、神戸市外国語大学(4.3%)と4大学でほぼ半数を占める結果となった。私立では、同志社大学(6.6%)、慶應義塾大学(3.2%)、早稲田大学(1.8%)という結果であった。

その理由については、全体では「教育内容」(26.8%)、「偏差値」(24.0%)、「ブランド」(11.6%)の順となっている。本学を第一志望とした設問への回答(Q11-1)と比べると「教育内容」が11ポイントほど高く、「偏差値」に至っては15ポイントほど高い結果となった。他大学を第一志望にする場合の理由(要素)が非常に明確な結果となった。

これらの大学との「教育内容」の差が、どこまであるのかは疑問であるが、本学としても引き続き、「教育内容」の充実を図る必要がある。また、色々な意見はあろうが、「偏差値」を上昇させることも本学を選択してもらうためには、非常に重要なことである。

その他、他大学を第一志望とした理由として選択肢以外の項目としてあがっていたものは、「学費が安いから」7名、「国公立大学だから」3名などがあつた。



表Ⅱ-13 第一志望の大学名

大学名	区分	割合	割合 (累計)
神戸大学	国公立	26.3	26.3
大阪市立大学	国公立	10.7	37.0
大阪大学	国公立	8.4	45.4
同志社大学	私立	6.6	51.9
神戸市外国語大学	国公立	4.3	56.2
慶應義塾大学	私立	3.2	59.4
岡山大学	国公立	2.7	62.1
京都大学	国公立	2.5	64.6
大阪府立大学	国公立	2.3	66.9
大阪教育大学	国公立	2.0	68.9
九州大学	国公立	1.8	70.7
早稲田大学	私立	1.8	72.6
関西大学	私立	1.4	73.9
筑波大学	国公立	1.4	75.3
横浜国立大学	国公立	1.1	76.4
広島大学	国公立	1.1	77.6
立教大学	私立	1.1	78.7
千葉大学	国公立	0.9	79.6
奈良女子大学	国公立	0.9	80.5
京都府立大学	国公立	0.9	81.4
名古屋大学	国公立	0.9	82.3
立命館大学	私立	0.9	83.2
その他		13.4	96.6
無回答		3.4	100.0

図Ⅱ-13-1 第一志望の設立区分比（全体）

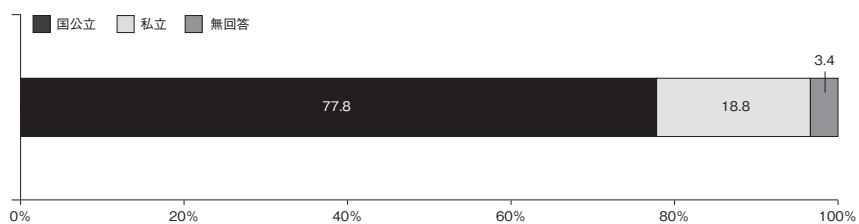
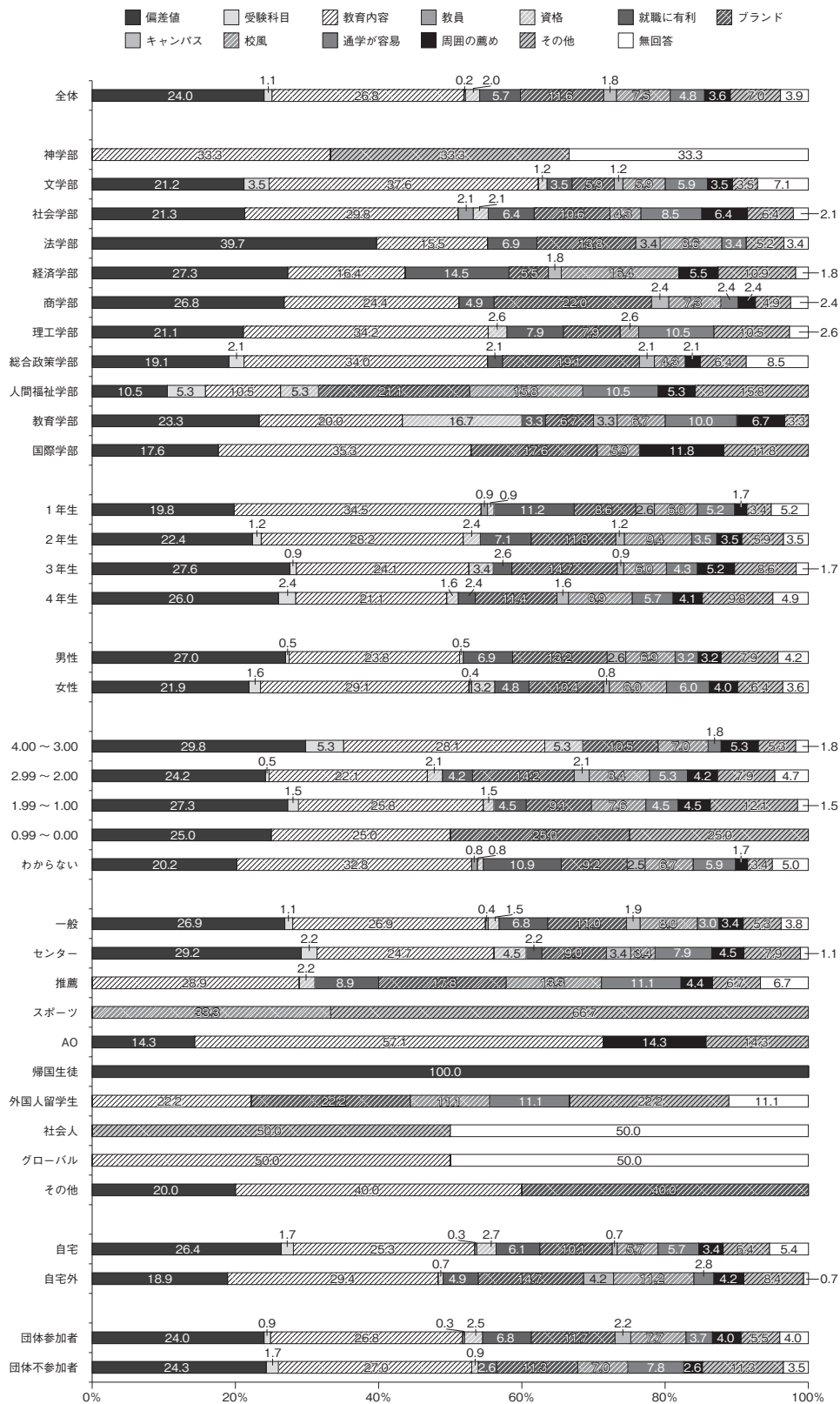


図 II-13-2 第一志望の理由



## 14. 関西学院大学を知った理由

### Summary

全体では、「高等学校や予備校の先生から」(33.1%)が最も多い回答であった。入試種別では入試の特徴がそれぞれ出ている結果となっており、それぞれの入試におけるステークホルダーがどこ(誰)であるのかが明確になっている。

Q11-4. あなたはどのような形で関西学院大学のことを知りましたか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 1 両親や親類から    | 2 高等学校や予備校の先生から |
| 3 友人や先輩から    | 4 受験雑誌などから      |
| 5 難易ランキング表から | 6 その他           |

全体では、最も多かった回答は「高等学校や予備校の先生から」(33.1%)で、次いで「両親や親類から」(32.1%)、「受験雑誌などから」(9.8%)、「友人や先輩から」(9.3%)、「難易ランキング表から」(7.4%)の順であった。前回調査の同一の設問と比較をすると、多少の違いはあるものの、概ね同じ結果となっている。

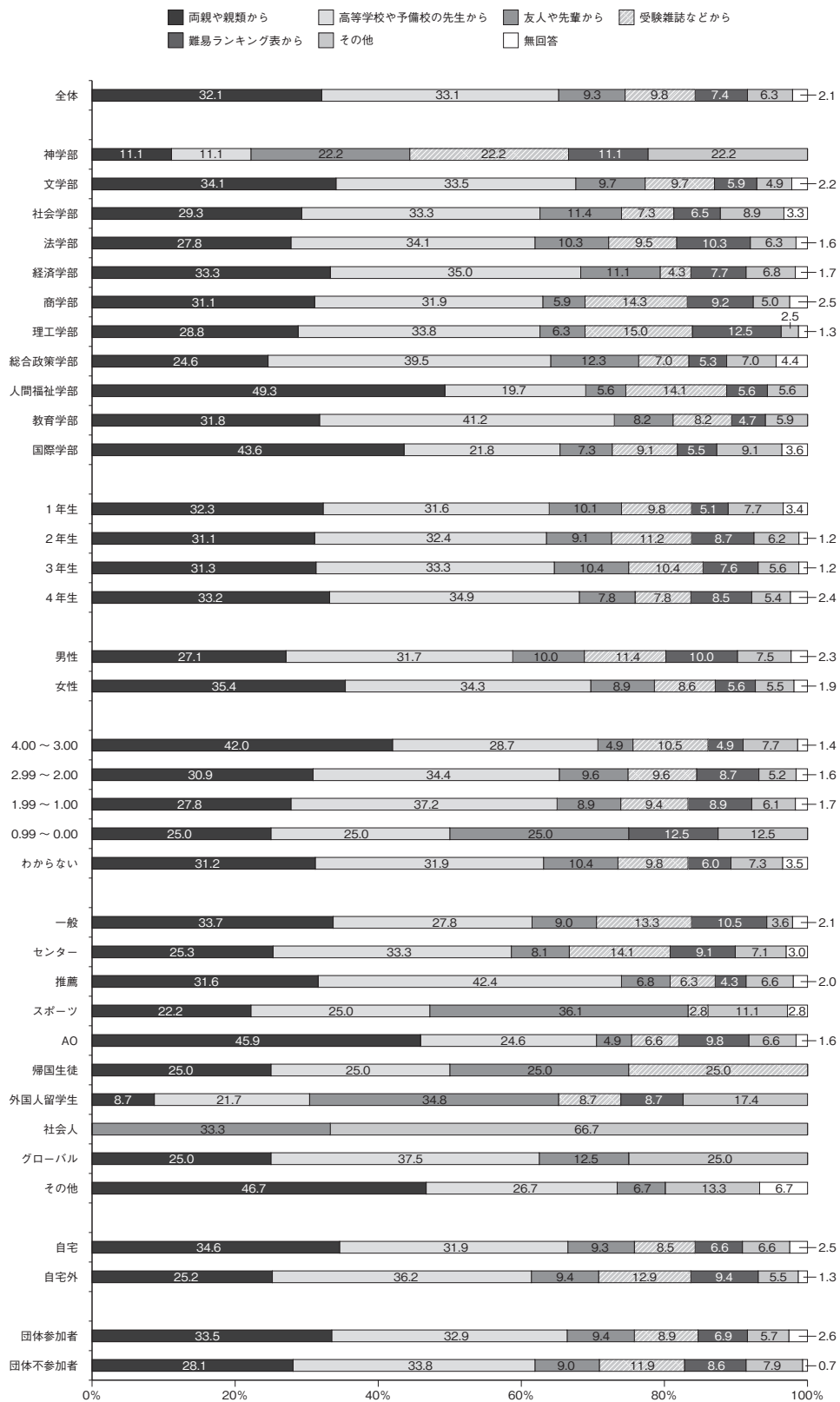
所属学部別では、「両親や親類から」の項目で、人間福祉学部(49.3%)と国際学部(43.6%)で高くなっている点と、「難易ランキング表から」の項目の割合が、法学部(10.3%)、商学部(9.2%)、理工学部(12.5%)でやや高くなっている点が、特筆すべき点と思われる。

性別では「難易ランキング表から」という項目で、女性が5.6%であるのに対し、男性が10.0%と性差がみられた。また、GPAでも「難易ランキング表から」という項目では違いがみられ、GPA4.00~3.00では4.9%であるのに対し、GPA2.99~2.00は8.7%、GPA1.99~1.00%は8.9%、GPA0.99~0.00は12.5%となっており、GPAが下位層になればなるほど「難易ランキング表」で本学を認知していたという結果となっている。

入試区分では、それぞれの入試区分による特徴が出る結果となった。一般入学試験では「両親や親類から」が33.7%、「高等学校や予備校の先生から」が27.8%の順で高く、センター利用入学試験では「高等学校や予備校の先生から」が33.3%、「両親や親類から」が25.3%の順で高くなっており、それに次いで両入試とも「受験雑誌などから」がそれぞれ13.3%、14.1%という結果となった。そして、スポーツ推薦入学試験では、「友人や先輩から」が36.1%、AO入学試験では「両親や親類から」が45.9%、グローバル入学試験では「高等学校や予備校の先生から」が37.5%と、それぞれ一番多い回答となっている。それぞれの入試におけるステークホルダーがどこ(誰)であるのかが明確になっている結果と思われる。

なお、「その他」としては、回答の多い順に「地元であるから」、「関関同立として」、「有名だから」、「インターネットから」などがあつた。

図Ⅱ-14 本学を知った理由



## 15. 大学進学先を検討した時期

### Summary

7割弱の回答者が、高校3年の4月までに検討をはじめている。性別や入試種別による検討開始時期の違いが顕著にあり、女性やAO入試受験者が早くから検討している傾向にある。

Q12. 大学進学先を具体的に検討し始めた時期はいつですか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| 1 高校入学時      | 2 高校1年9月ごろまで | 3 高校1年終わりまで  |
| 4 高校2年9月ごろまで | 5 高校2年終わりまで  | 6 高校3年4月     |
| 7 高校3年9月ごろまで | 8 高校3年12月頃まで | 9 高校3年2月ごろまで |

本設問は本学の今後の入試広報において重要な設問であると考え、今回の調査で初めてたずねた。もっとも多い回答は「高校3年9月ごろまで」の20.2%であるが、累計で見ると、全体では、「高校入学時」(15.9%)であったものが、「高校1年終わりまで」(24.0%)、「高校2年終わりまで」(51.3%)、「高校3年4月」(68.5%)となっている。つまり、高校3年生の春までには70%弱の高校生は進学先を検討し始めているということであり、当然それまでには本学の入試を含めた広報（アプローチ）をしておく必要があるということを表している。

次に性別による差異があるのかをみてみたい。男性は「高校1年終わりまで」に検討を始めたものは22.8%であるのに対し、女性は24.7%、「高校2年終わりまで」では男性は47.7%、女性は53.8%となっており、女性の方が男性に比べ、進学先を早く検討する行動をしていることが伺える。

GPAでは、「高校1年終わりまで」は、GPA4.00～3.00では30.1%、GPA2.99～2.00は21.5%、GPA1.99～1.00は23.8%、GPA0.99～0.00は25.0%となっており、GPA上位層の方がGPA下位層に比べ、進学先を早く検討する行動をしていることが伺える。

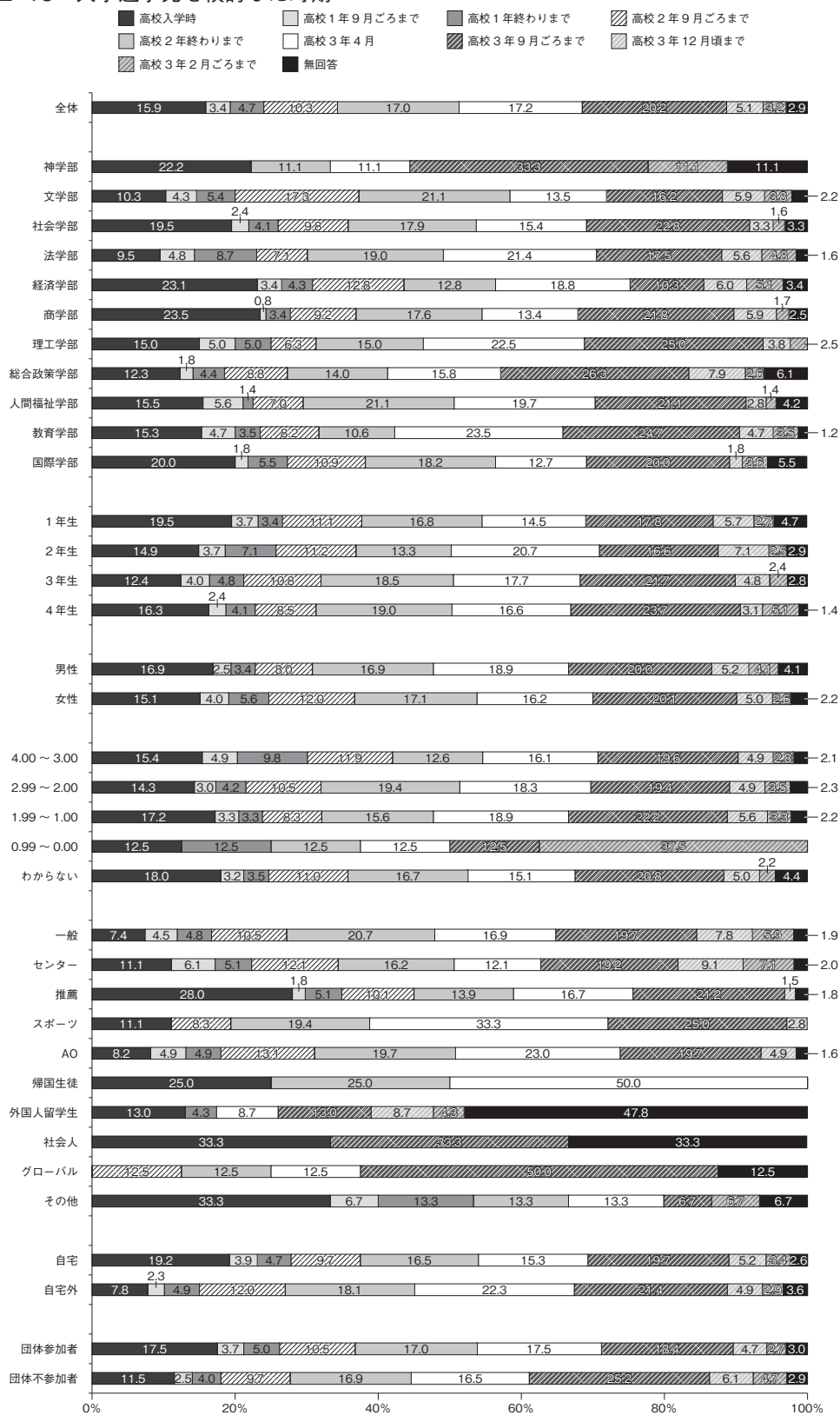
入試種別で特筆すべき点は、AO入学試験が挙げられる。結果をみると、「高校1年終わりまで」は18.0%と低く、「高校2年終わりまで」で50.8%、「高校3年4月」で73.8%と他の入試区分と比べて高くなる。つまり、本学AO入学試験受験者の特徴として、高校2年の終わりから高校3年4月までに一気に進学先を検討しているという傾向がみられる。

また、「推薦入学試験」では、「高校入学時」が28.0%、「高校1年終わりまで」合算すると34.9%と全累計24.0%に比べて10ポイント以上高くなっている。これは高等部推薦や継続校、提携校など高校入学時から本学を志望（入学）する層が多く含まれているためであろう。

居住形態では、「高校1年終わりまで」に検討を始めるのは、自宅生27.8%、に対して自宅外生は15.0%と非常に低くなっている。「高校2年生終わりまで」でも自宅生は54.0%であるのに対し、自宅外生は45.1%と低くなっている。その理由は不明であるが、今後調査すべき結果と思われる。

また、団体へ所属の有無では「高校1年終わりまで」に検討を始めるのは、団体に入っているものは26.2%に対し、入っていないものは18.0%と非常に低くなっている。「高校2年生終わりまで」でも、入っているものは53.7%であるのに対し、入っていないものは44.6%と低くなっている。この原因を推測するには情報が不足しているが、何かしらの因果関係があるのかもしれない。

図Ⅱ-15 大学進学先を検討した時期



## 16. 社会人とのコミュニケーションとその影響

### Summary

社会人とのコミュニケーションがもっとも頻繁な先は、「アルバイト先の同僚や上司」であった。社会人との会話によって影響を受けたのは、「社会人になること（就職すること）への意欲が向上した」が21.9%ともっとも高い結果となった。将来へのキャリア像を描き、問題意識を高める点では、学生時代の社会人との接点は、非常に重要である。

- Q13-1. 現在のあなたの社会人とのコミュニケーションについてお尋ねします。  
A～Dのそれぞれの方と話をする機会がありますか。0（ほとんど話をする機会がない）～4（ほぼ毎日話をする）までの数字を1つだけ選んで○印をつけてください。
- A. 教員（ゼミナールの先生や授業担当者など）
  - B. クラブやサークルの部長・顧問、コーチ、監督
  - C. アルバイト先の同僚や上司
  - D. 学外での学習やサークルの先生・指導者や同僚

- Q13-2. 会話によって、あなた自身にどのような影響がありましたか。  
最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。
- 1 学業に取り組む意欲が向上した
  - 2 課外活動、ボランティア活動に取り組む意欲が向上した
  - 3 アルバイトに取り組む意欲が向上した
  - 4 留学への意欲が向上した
  - 5 資格取得への意欲が向上した
  - 6 進学への意欲が向上した
  - 7 社会人になること（就職すること）への意欲が向上した
  - 8 特に影響はない

Q13-1では、社会人とのコミュニケーションについて、以下のA～Dの対象に対する接触度を調査し、また、Q13-2では、会話によりどのような影響があったかを調査した。

会話によって影響を受けたのは、「社会人になること（就職すること）への意欲が向上した」が21.9%ともっとも高く、「学業に取り組む意欲が向上した」が20.9%と続く。社会人とのコミュニケーションにより、将来へのキャリア像を描き問題意識を高める点では、学生時代の接点は非常に重要であると考えられる。また、近年、学業への取り組みに対しては企業の採用選考でも重視する傾向にある。その点、「学業に取り組む意欲が向上した」点は影響が大きい。学部別では、「社会人になることへの意欲が向上した」は総合政策学部30.7%、経済学部29.9%、商学部23.5%と実学的な領域や企業との接点による学びに触れる機会のある学部の割合が高い。学年別にみると、「社会人になることへの意欲が向上した」は学年が高くなるにつれ割合が大きくなる一方で、「学業に取り組む意欲が向上した」は低学年次への影響が大きい。

### A 教員（ゼミナールの先生や授業担当者など）

全体でもっとも回答が多かったのは、「週に1日程度話をする」（43.0%）であり、次いで「ほとんど話をする機会がない」（26.7%）である。ただ学年別では、1年生では「ほとんど話をする機会がない」学生が42.1%であるが、4年生では7.1%まで低下する。また、「週に1日程度」以上話をする（「ほぼ毎日話をする」「週に2～3日程度話をする」含む）学生が、1～2年生が4割台

に対して、3～4年生では8割台と倍増する。これらはゼミナール所属の有無によるところが大きいと考えられるが、「ほぼ毎日話をする」と「週に2～3日程度話をする」を含めた割合をみるといずれの学年も2割台前半となる。これをみるといずれの学年も特定の層が積極的にコミュニケーションをとるものと考えられる。GPA別をみると、GPA値が高くなるにつれてコミュニケーションの頻度が高くなる傾向にある。一方、GPAを認識していない「わからない」と回答している層の半数近くが「ほとんど話をする機会がない」と回答している。

#### B. クラブやサークルの部長・顧問、コーチ、監督

全体でもっとも回答が多かったのは、「ほとんど話をする機会がない」(51.4%)である。ただ、設問がクラブやサークル関係の社会人を対象としているので、団体所属の有無により回答は異なる。団体所属者でみると、「ほとんど話をする機会がない」は依然としてもっとも多い回答であるが、37.5%まで低下する。

次に団体参加者に絞ってみると、学年別では、「月1回程度」以上話をする割合は、2年生(70.3%)、1年生(67.3%)、3年生(56.6%)、4年生(47.2%)と4年生以外は、過半数を超える。1、2年生の低学年次生のコミュニケーションが非常に高く、3、4年生になるほど少なくなる。高学年はクラブでの幹部等、特定の役職者に絞られてコミュニケーションをする、あるいはサークルでは3年生を終えると引退する傾向があると考えられる。更にコミュニケーションの頻度をみると「週2～3回程度」以上話をする学生は、2年生(36.9%)が最も多くクラブ・サークル活動の活発さが伺える。男女別では、「月1回程度」以上話をする学生は、女性の57.6%に対して、男性の65.7%と男性のほうがコミュニケーションをとっている。

#### C. アルバイト先の同僚や上司

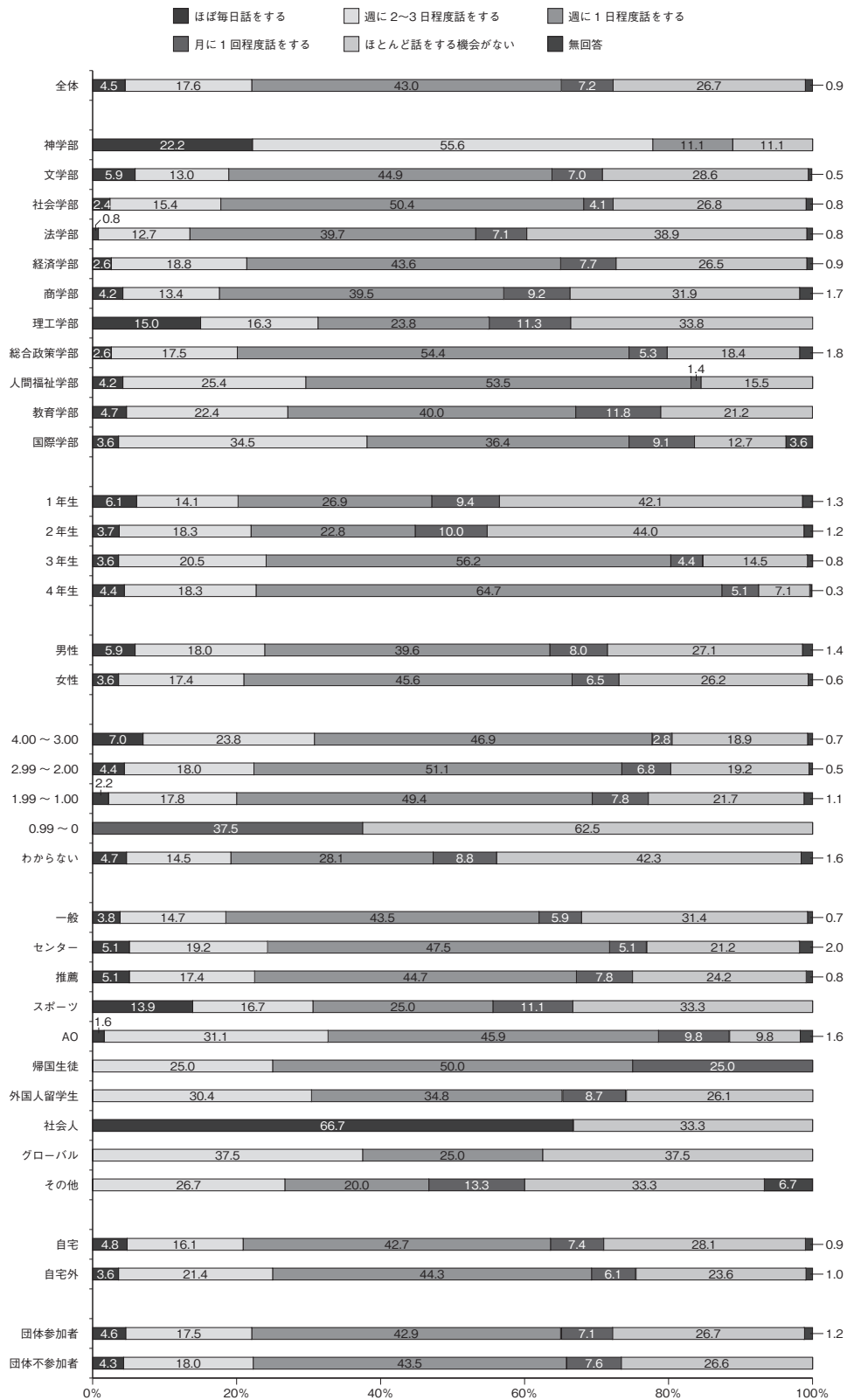
全体でもっとも回答が多かったのは、「週に2～3日程度話をする」(45.2%)であり、次いで、「ほとんど話をする機会がない」(30.2%)である。学年別では、「ほぼ毎日話をする」では4年生が13.6%と最も高く、「週2～3日程度話をする」では3年生59.4%、4年生50.5%と上級生の割合が高い。4年生は単位の修得状況等により、アルバイトをする機会が増えていること、あるいはアルバイト先で長期間勤務することにより、責任ある仕事を託されながら業務を遂行しているとも考えられる。一方、「ほとんど話をする機会がない」では1年生が48.8%と最も高く、これは本調査の実施時期が6月であることから、アルバイトを始めていない学生が多いことも考えられる。男女別では、「ほぼ毎日話をする」では男女ともに差はほとんどないが、「週2～3日程度話をする」では女性49.2%、男性39.2%と女性が10ポイント上回る結果となった。

#### D. 学外での学習やサークルの先生・指導者や同僚

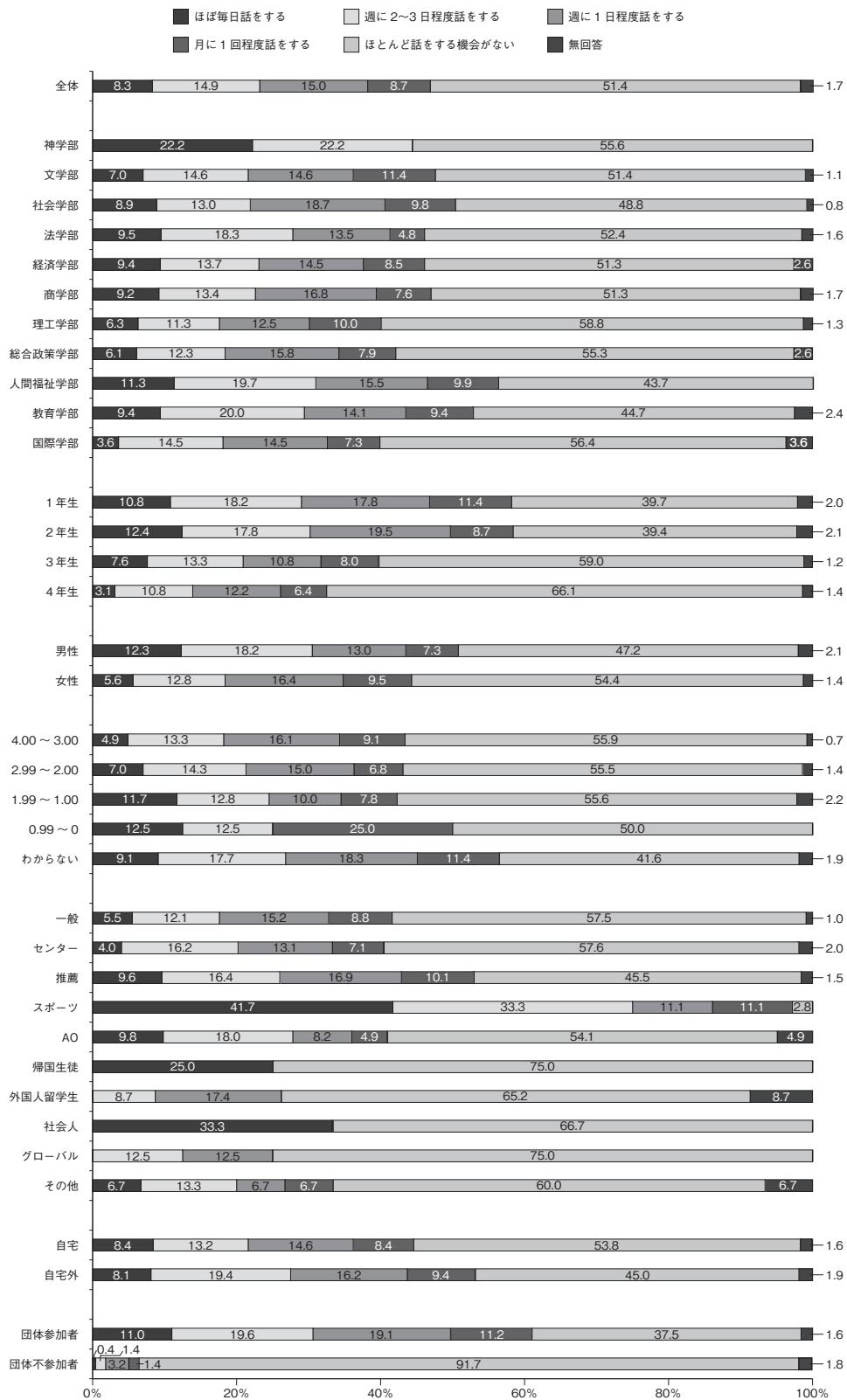
全体でもっとも回答が多かったのは、「ほとんど話をする機会がない」(58.4%)であり、A～Dの調査項目の中で、この選択肢の割合がもっとも高い調査項目であった。調査項目が学外での学習やサークルの社会人を対象としているので、そういった接点がA～Cの対象者と比べて少ないことが考えられる。「月1回程度」以上話をする学生は39.8%であり、学部別で平均を上回るのは神学部55.5%、人間福祉学部47.8%、経済学部47.0%、教育学部47.0%、商学部41.1%、総合政策学部40.3%と外部団体との活動を積極的に行っている学部の割合が高い傾向にある。



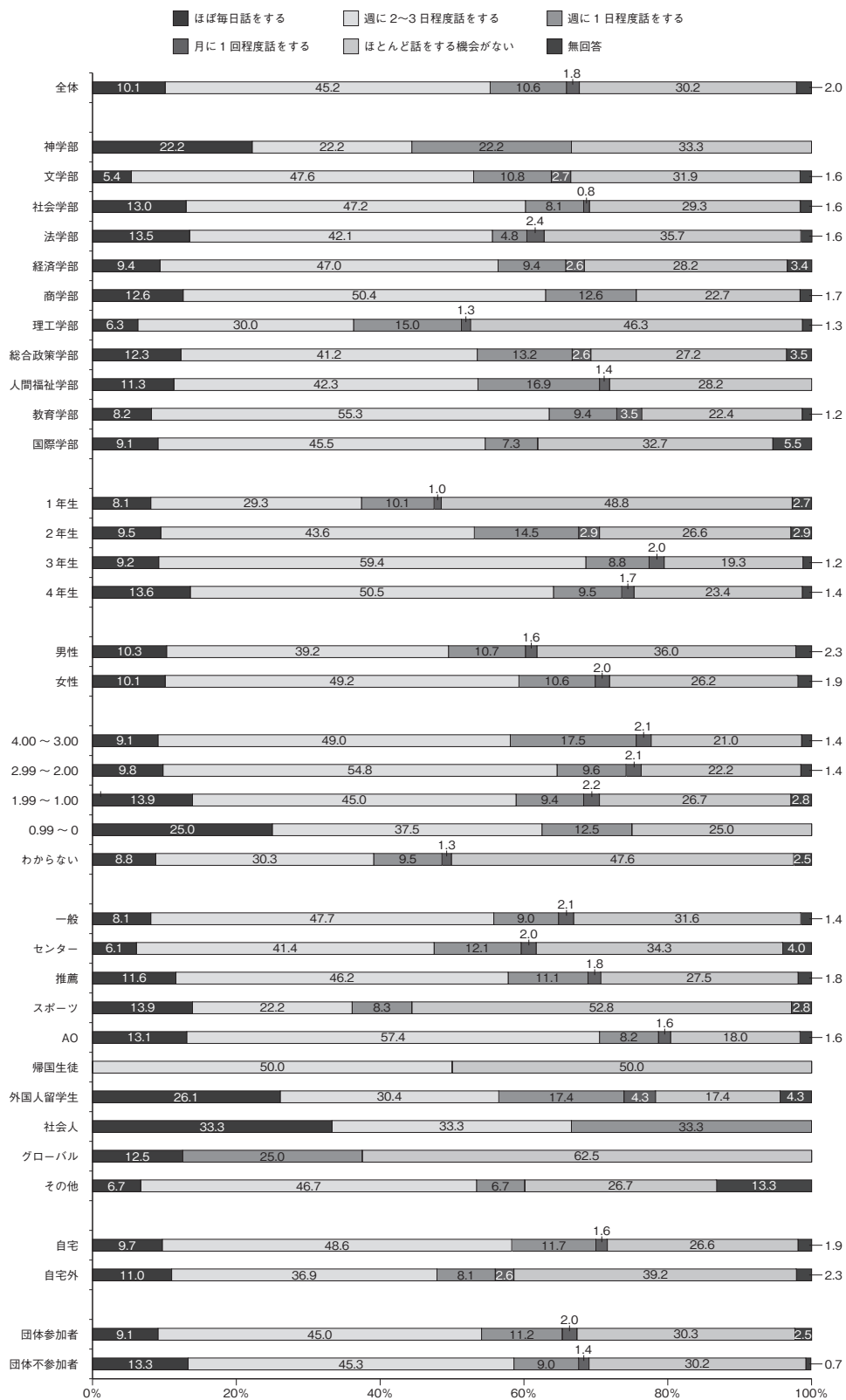
図Ⅱ-16-1 社会人とのコミュニケーション A 教員（ゼミナールの先生や授業担当者など）



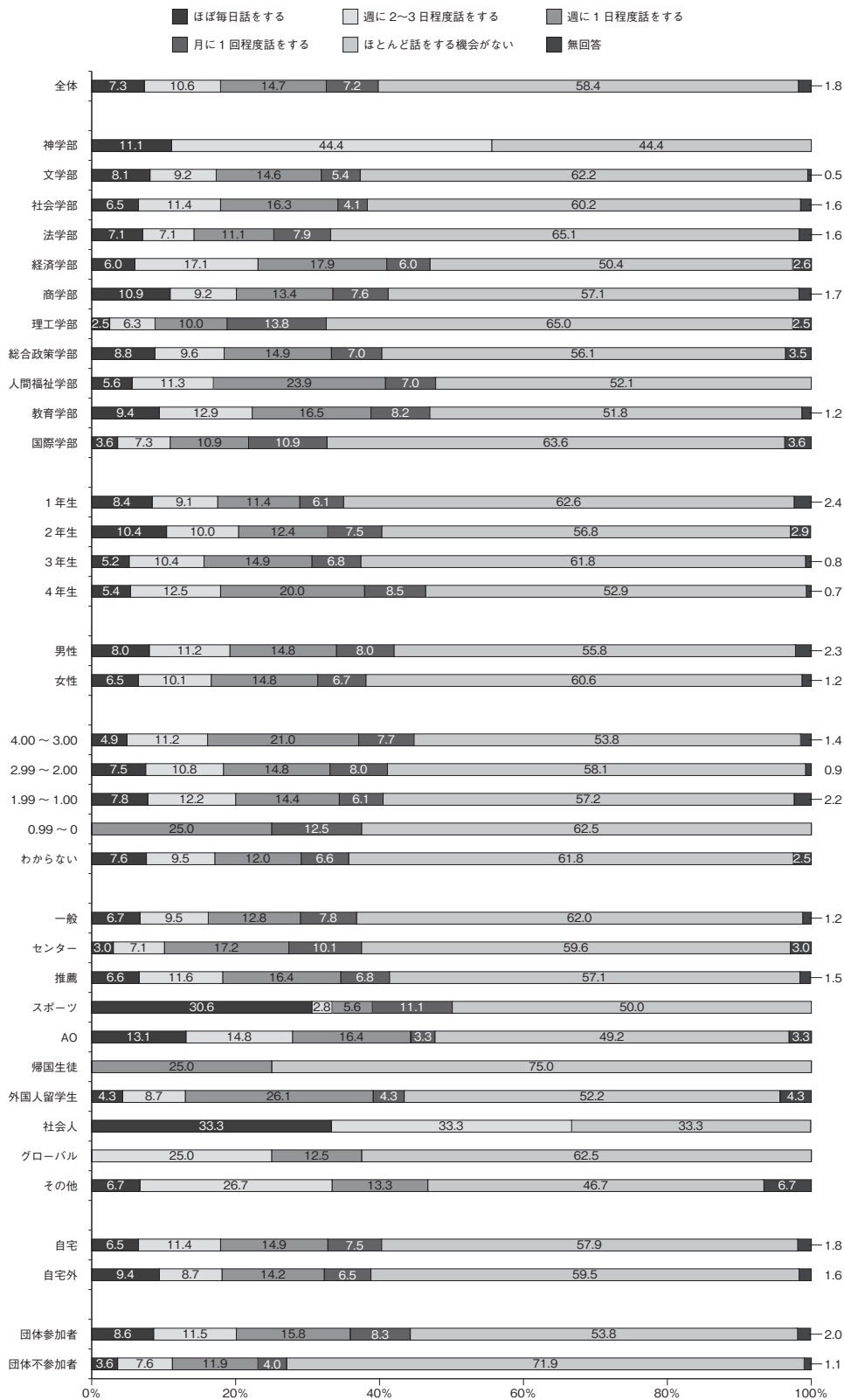
図Ⅱ-16-2 社会人とのコミュニケーション B クラブやサークルの部長・顧問、コーチ、監督



図Ⅱ-16-3 社会人とのコミュニケーション C アルバイト先の同僚や上司



図Ⅱ-16-4 社会人とのコミュニケーション D 学外での学習やサークルの先生・指導者や同僚



図Ⅱ-16-5 社会人とのコミュニケーションによる影響

